

共助社会づくりフォーラムin滋賀 議事録

内閣府政策統括官（経済社会システム担当）

共助社会づくりフォーラムin滋賀

議事次第

日 時：平成27年 2月 7日（土）13:30～16:30

場 所：FeriE(フェリエ) 南草津 5F 大会議室

- 1 開会
- 2 基調報告「共助社会づくり懇談会における主な議論」
- 3 基調講演「地域で困っている人を助けるために、どうつながっていくか」
- 4 事例紹介「つながりで支える地域福祉に根差したNPO活動と農業を生かしたコミュニティビジネス」
- 5 パネルディスカッション
「社会課題解決のために、いかに『つながり』を生み出すか」

○司会 大変長らくお待たせいたしました。定刻となりましたので、ただいまより「共助社会づくりフォーラムin滋賀」を開会いたします。

本日の司会進行は淡海ネットワークセンターで担当します。どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

初めに、主催者を代表いたしまして、滋賀県総合政策部長の北川正雄より、開会の挨拶を申し上げます。

1 開会あいさつ

滋賀県総合政策部長

北川 正雄

皆さん、こんにちは。ただいま紹介いただきました滋賀県の総合政策部長の北川と申します。どうぞよろしく願いいたします。

きょうは共助社会づくりフォーラムin滋賀ということで銘打っているのですが、このフォーラムは内閣府の地方共助社会づくり懇談会に協力いただいております、内閣府と滋賀県の共催という格好で実施をさせていただいております。

内閣府の共助社会づくり懇談会では、地域の活性化でありますとか、自分の能力を十二分に発揮できるように地域のきずなを生かした魅力ある、活力ある社会をつくっていかうということで、支援策の検討をされてきたところでございます。

この懇談会で検討されております共助社会は、誰もが自分の負っている役割を果たしながら、お互いに支え合っていこうという、そういう社会だろうと考えておりますけれども、考えてみますとこのイメージというのは、滋賀県が脈々と受け継いできた環境なり、福祉なり、自然のつながり、あるいは人と人のつながりといったものを大事にして、地域で人と人がお互いに支え合っていこうという活動なり文化等と相通ずるものがあると考えております。

本件におきましては平成23年、24年、2カ年にわたりまして新しい公共支援事業というものに取り組んでまいりました。その中で人材育成でありますとか、財源、安定的な収入源の確保、情報発信力の強化といったものが従来からも課題であったわけでございますけれども、それに加えまして例えば組織のマネジメント力の強化であるとか、もともとの社会的使命は何なのかといったことを再確認する。こういった新しい課題が見つけれられていると思っております。

こうして色々な課題を解決するにはどうしたらいいのかということで、25年度、26年度の2カ年にわたりまして、滋賀の地域円卓会議、これはきょうのパネラーの方にもお世話になっておりますけれども、NPOでありますとか福祉の分野、色々な分野での主に中間支援組織の方々を中心として構成をされておりますが、この滋賀の地域円卓会議で例えば若者の就業支援であるとか、後継者の育成、地域の活性化、色々な課題を乗り越えて転換していくためにどんなことが必要かということを経験してきていただいております。

この議論の中で見えてきたことで、特につながりということがあるのではないかと考えておまして、1つの組織、団体だけでやるよりも、色々な多様な主体とのつながりを大事にしていく中で、さまざまな相乗効果あるいは新しい発見、情報の共有が次につながっていくことが期待できると思っております。

今回、内閣府の共助社会づくり懇談会、それから、滋賀県の地域円卓会議、こういった議論の中から見えてきたことを改めて共有していただいで、これからの課題の解決、まち

づくりのための施策、対応の強化といったことに生かしていただくきっかけになれば、大変ありがたいと思っております。

簡単でございますけれども、挨拶とさせていただきます。きょうはどうぞよろしく願いいたします。(拍手)

○司会 ありがとうございました。

それでは、続きまして、基調報告に移ります。

内閣府政策統括官（経済社会システム担当）付参事官（市民活動促進担当）付参事官補佐の坂井潤子より「共助社会づくり懇談会における主な議論」について報告いたします。

2 基調報告

「共助社会づくり懇談会における主な議論」

内閣府政策統括官（経済社会システム担当）付参事官

（市民活動促進担当）付参事官補佐

坂井 潤子

皆さんこんにちは。内閣府の坂井潤子と申します。

本日はお忙しい中、これだけたくさんの方々にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

また、本日の共助社会づくりフォーラムin滋賀ですけれども、我々内閣府と、滋賀県の皆様、淡海ネットワークセンターの皆様との共催ということで開催をさせていただきました、関係者の方々にも御礼を申し上げます。

それでは、早速ですけれども、皆さん、アベノミクスという言葉を色々なところで聞かれる機会があるかと思うのですが、アベノミクスによる経済状況の好転や、長年続いてきたデフレからの脱却というものが視野に入ってきた、そういった声が至るところである一方で、東京はまだしも、地方にまで目を向けたときに、そういった効果というものが実感できないのではないかという声も上がっているのが現状でございます。

また、人口減少や超高齢化社会ということは、これまでもずっと言われてきたところなのですけれども、ここに特に注目した場合に、政府としても今のままで進んでしまうと人口がどんどん減っていき、高齢化社会もどんどん進んでいくと何の希望も持てないのではないかといったこともありまして、政府の中に経済財政諮問会議のもとで「選択する未来」委員会というものを設置しまして、将来的な50年ぐらい先の日本というものの目指す姿が検討されたということが実際にございます。

それとあわせて、我が国の経済や社会などそういったものを生き生きとしたものにして、成長を持続的なものにするためにということで、全ての人材がそれぞれの持ち場で、その力を十分に発揮する全員参加が重要と考えておりまして、その際には自助や自立が基本にはなるものの、共助の精神というものを発揮して、行政だけではなくてNPO法人や自治会、企業の方々、大学などの教育機関、その他多様な主体が地域を支えて、こういった活力あふれる共助社会をつくっていく必要があると考えられております。

また、そういった活力あふれる社会づくりというもののために、一人一人の市民がボランティアや寄附など、様々な手段で貢献していくことが考えられまして、そのための仕組みづくりをさらに整理していかなければいけないと、こういった問題意識を持っているところでございます。

お手元に「共助社会づくり懇談会における主な議論」という内閣府からの資料があると思うのですけれども、こちらをご覧くださいまして、表紙の次ですね。こういった流れから共助社会づくりが推進されているのですが、政府のほうで毎年、経済財政運営と改革の

基本方針ということで、経済財政運営に当たりどういったことに重点を置いていくかとか、インパクトを出すものということで、骨太方針と呼ばれているものがあるのですが、2013、2014年ともにこういった考え方が盛り込まれました。

実際に安倍総理も「活力ある共助社会づくりを進めていきたいと思います」ということで御発言されておりますし、昨年6月、これは大体6月頃が例年の閣議決定の時期なのですけれども、骨太2014の中でも、「地域の課題解決や活性化の重要な担い手であるNPOやソーシャルビジネス等の育成などを通じて活力あふれる共助社会づくりを推進するとともに、共助の活動を資金面から支えるよう、関係府省が連携して寄附文化の醸成を推進していく」というような言葉が盛り込まれております。特にこの「寄附文化の醸成」ということは、これまでこの骨太方針というのはここ10年ぐらいつくられてきたものなのですけれども、その中で初めて入った言葉となります。

こういった流れのもとで、我々内閣府としましても、NPO等による地域の絆を生かした共助の活動を推進するというので、そのための政策課題の分析と支援策の検討を行う場ということで、内閣府の経済財政政策担当大臣のもとに、有識者の皆さんに御議論をいただく共助社会づくり懇談会というものを設置いたしまして、平成25年4月から開催をしてまいりました。この後、基調講演、パネルディスカッションで御登壇いただく深尾先生にも委員になっていただいております。

この中で現在の議論と今までの取りまとめ等々を少し御紹介させていただきたいのですが、共助社会づくり懇談会の中で平成25年12月に、3つのワーキンググループでの報告書の取りまとめというものがなされまして、その内容について後ほど御紹介をさせていただきます。

現在もこの懇談会を開催しております、その次のページの開催実績をご覧くださいと、25年4月から始まりまして、現在でも意見交換会という形で開催をさせていただいております。まさに一昨日、第10回、共助社会づくりの推進についてということで開催しております。この中で今は多様な主体が参画していくことが必要ですとか、共助社会づくりを目指していくことが必要ですといった中で、そもそも共助社会づくりというものはどういうものなのかというのがなかなか漠然としかわからない。そういった声もいただきますし、実際に具体的に誰が何をやらなければいけないのかというのがわからない、という言葉もたくさん御意見、御指摘としていただきますので、そこを書き表していけるような報告書、教科書になるようなものをつくれれば良いかなということで、今、委員の方に御議論いただいているところです。

それでは、ここの下にある人材面の課題、資金面の課題、信頼性の向上に関する課題ということで、各ワーキンググループの報告書について、簡単に御報告をさせていただきます。

一昨年12月の取りまとめですけれども、人材面の課題ということで、NPOが中心になっているところは多々あるのですが、そういった活動をされる中で大きな悩みの1つとして、

人材というものがあるという声が上がっていました。特にNPO法人自身も人材不足を認識されていたり、委員の皆様の声としても、世論調査などを見るとNPO法人には人材面の課題があるという声があったりとか、特にスタッフさんというのももちろん必要なのですけれども、組織マネジメントや専門的なノウハウというものを身につけている人材が不足していて、なかなかそこにお金をかけられないという現状があるという声をいただいております。

こういった話を受けまして、右側のワーキンググループで提示された主な方向性をご覧いただきたいのですが、この中で専門分野に特化した対応の人材育成の専門講座というものを行政がモデル事業として実施して、それを広く発展させていって、活用できるようなモデルをつくれなにかということで、わずかですが予算措置をしまして、今、取り組んでいただいているところです。

あとは特にNPOへの就職を希望する新卒の方が増えているという話を聞いていまして、こういった学生時代から、例えばゼミやサークル活動を含めてですが、そういった中でNPOに関する理解が進むように大学教育や、高校、小中学校、そういった中でNPOの活動や社会課題解決の仕組み、そういったものに関する座学や、OJTで実施している先進事例というものを、皆さんで使っていただけるように積極的に情報発信していきたいと取り組んでいます。

その下の人材の流動化ですが、企業で活躍されている方々だけではなくて、共助社会づくりということであれば、企業や行政もそうなのですが、教育機関や、そういった方々の理解を得て、実際に活動に参画することが大事だということで、相互の人材交流など、そういったものにももう少し力を入れていくべきなのではないか。中小企業などの中ではソーシャルビジネスへの参入、中小企業自身のソーシャル化といったものも進んでいるところもありますので、そういったものをより発信していくべきではないかという御意見もいただきまして、そこに関しても成功事例の発信や、また、中小企業支援策ですと我々国のほうでも中小企業庁などとの連携も含めて、何かできることはないかということで検討をしているところでございます。

次に資金面の課題に行きまして、人材とあわせてよく言われるのが、活動したいけれども、資金面でなかなか厳しいという話があって、資金としては寄附や会費の拡大ということも1つあるのではないかと考えております。NPO法人の活動に関して寄附をしたいと思うと回答した人というのはわずか、約2割という数字にとどまっています、これがNPO法人の活動自体がよくわからないとか、そういった話があるというのが現状でございます。

また、市民ファンドの存在というものが大きくなってきてはいるものの、地域に一定の影響力を持つ団体さんというのは限られていたり、一般市民が知る機会が少ないというような問題を指摘されておまして、こういったものへの対応の方向性ということで、まずはこういった資金集めのためのノウハウを知ることが必要だと。そういったものをビジョンの策定なども含めて支援していかなければいけないということがありました。寄附文化の醸成ということが、先ほど申し上げた骨太方針のほうにも初めて入ったということもあ

りますので、では寄附というのはどういう意義があつて、そのためにどういったことに注意しなければいけないのかとか、そういったことも含めたシンポジウムやキャンペーンを実施していければ、展開できればなど考えています。

その下のNPO等への融資の拡大ですが、借り入れをしているNPO法人の7割以上が理事長などつながりのある個人からの借り入れ、銀行や政府系金融機関、信用金庫というものからの借り入れはわずか1割程度だという現状があります。

実際に金融機関の方にお話を聞くと、NPO等の融資を別に拒んでいるわけではないけれどもまだまだ接する機会が少ないのでよくわからないということや、一部のところにはデフォルト率というものがもしかしたら高いのではないかという誤解があつたりということもありまして、こういったところへの接する場というか、接点というものを行政もしくはほかの主体が、十分につくっていかなければいけないということでございまして、それは金融機関と行政だけに限らず、先ほどの人材の話なども含めて考えると商工会議所・商工会、専門家の方々、税理士・公認会計士の方々ですとか、学術機関もそうなのですけれども、こういったところが相互交流、連携ということで、課題の共有や、共有するだけではだめなので、その課題を解決するために何をどうしていくかということまで話せる場ということで、共助社会の場というものを提案させていただいております。

最後、信頼性の向上ということで、これも情報開示のあり方とか、行政によるNPO法人への指導やそういったところも、一部の信頼を棄損するような団体のせいで全てがだめにならないよということ、しっかりやっていかなければいけないということも取りまとめられております。そこから後ろは具体的な事例ですとか、内閣府のほうで実施しました世論調査ですとか、そのほかの調査結果をつけさせていただいておりますので、後でご覧いただきたいと思ひます。

今日の共助社会づくりフォーラムin滋賀ですけれども、共助社会づくり懇談会の地方版ということで、地域の実情を踏まえた御意見をいただくということで開催をしております、全国で今年度11カ所開催をさせていただいております。まさに今日がその11カ所目、ラストということでして、皆さんの活発な御意見や、登壇者の方々からのお話を伺うことができるということで楽しみにしておりますので、ぜひ活発な御議論の参加、質問への参加をお願いできればと思ひております。

私どもの報告とは以上とさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

○司会 ありがとうございました。

では、続きまして、基調講演に移ります。 滋賀県では平成23、24年に取り組みました新しい公共支援事業で見えた課題を解決するために、滋賀の地域円卓会議を開催しています。本日はこの円卓会議での取り組みや全国の他の地域での取り組みをもとに「地域で困っている人を助けるためにどうつながっていくか」について、当円卓会議の座長であり、また、共助社会づくり懇談会委員でもあります深尾昌峰様より御講演いただきます。

なお、質問につきましては本日、お配りしております質問票に質問したい内容を御記入の上、休憩の際に前のボックスに入れていただきますよう、よろしくお願いいたします。

それでは、深尾様、よろしくお願いいたします。

3 基調講演

「地域で困っている人を助けるために、どうつながっていくか」

公益財団法人京都地域創造基金理事長
共助社会づくり懇談会 委員 深尾 昌峰

皆さん、こんにちは。ただいま御紹介いただきました深尾でございます。

先ほど内閣府の坂井さんからありましたが、今、国のほうも大きくある意味で私たちにとって社会の変わり目ということで、色々な制度や政策を共助社会というキーワードで編み直しをし始める。経済財政諮問会議の「選択する未来」委員会では、50年後の社会をどういう社会にしていくのかについて議論をしてきました。

今まではどちらかというと、NPOは好きな人たちがやるものという感じだったのが、かなり骨太の方針も私たちが色々言っていくと、そうだね、これは大事だねというふうに骨太の方針に入っていく。そういう時代に入ってきました。

そういう中で私たちは地域でどういうことを考えていかなければいけないかということ、今日は皆さん方と考えたいと思います。数字を少し並べてみました。これは人口動態です。いわゆる少子高齢化というのはどういうふうに捉えるかというので、2005年の人口を100として、世代別に切り分けた表です。ですので、ここが100です。2005年、ちょうど10年前の人口を100としたときに、今、2015年、ですから子供と言われる0～14歳までは84.4になる。これは実は上の黒い数字が全国平均です。下がきょうは滋賀県の数字を拾っていきます。

ですから滋賀県は非常に全国的に見ると特殊な県です。人口は社会的に増えている県ですので、実は子供の生産力人口も減ってはいますが、全国的な減りからするとかなり特殊な状態にある。ただ、高齢化は65歳以上の人たちは全国よりも少し多いということです。増え方は多いということと、だけれども、75歳以上は実は少ない。実は今のある意味で65歳ぐらいの人たちがピーク。

ただ、2035年の状況を見ると減り方は確かに若い世代の減り方というのは全国的に見ると本当に滋賀県は特殊な、大きく構造的には変わりますが、ただ、高齢化を見るとかなり深刻なのです。滋賀県全体で見ると65歳以上が160.7、あと20年後には1.6倍になって、75歳以上の人は実は2倍になる。そういう社会の構造の変化が滋賀県全体を襲うのです。

そうか、それは多分、日ノ本町とか西浅井とか旧虎姫とかああいうところだろうというイメージがどこかにあるかもしれない。そういうことではないのです。実は先ほどの茶色い数字は滋賀県全体の数字です。次は緑の数字をつけました。これはどこの町だと思えますか。今の2015年のところでいくと、実は子供とか生産力人口が増えている。だけれども、65歳以上の先ほど滋賀県は多かったと言っていた。204というものは多かったですね。全国平均から見ても多かったのに294.9になった町。どこだと思えますか。今、皆さん方は寂しい町の名前を何人かおっしゃいましたが、違いますね。これは実は栗東です。栗東や守山、

そういういわゆるベッドタウンはこういう傾向。ただ、栗東なんか本当にこうです。3倍になるのです。

これは急激にここまで私たちの社会の構造が大きくかわるということで、今まで私たちは余り経験していません。社会的に経験していないわけです。だから本当にある意味で3倍になる。だから最初は暗い話ばかりになりますが、今よく認知症の方が車に乗っていて、高速道路を逆走するといった話がありますね。この前も高速道路を逆走されてトラックとぶつかってお亡くなりになられるという悲劇があって、いわゆる例えば認知症の方の数だけ捉えてもかなりの増え方になる。今でも推計上は何パーセントなのですか。今、どれぐらいの方が認知症の方が運転免許を持っているかという推計がこの前、警察庁が発表しています。いわゆる75歳以上の方の6～16%が認知症の方ではないかと推計されている。現実的に今の社会です。今の社会でも実は少なく見積もっても75歳以上の6%ぐらいは認知症の方が運転免許を持って今、運転をされている。その数が飛躍的に増えていくわけです。こういう社会を私たちは迎えていくわけです。

単純に社会保障の問題だけではなくて、私たちの暮らし方とか、今まで当たり前だと思っていたものが実は非常に構造的に変化をしていく。そういう中に私たちは生きているわけです。そういうことを捉えて私たちの社会の課題は多様化したり複雑化している。課題先進国という言い方を国際的にされたりします。今、少子高齢化という急激な人口変動を迎える国というのは今までありませんから、今、世界中が実は日本がこういう状況をどうやって乗り越えていくのかということ、特にドイツなんかは見ているわけです。次ドイツがこういう状況になっていきます。そういうある意味で課題先進国という言い方をしたりします。

そうすると、今の当たり前では想定できない問題、超えていけない問題がたくさん出てくるわけです。今でもそうかもしれません。今の当たり前では想定できない問題。もっと言えば行政依存型の解決手法では限界があるような問題もたくさん出てくる。これは実は今もそうなのです。これはよく言う財政的な問題だけではなくて、原理的にもそうです。

例えば私はいつもこの表で、この図で色々な色々なことを説明していますが、私たちの社会というのは、課題というのは移ろっています。これが社会的認知です。私たちの社会の課題、例えば今、認知症の問題だ、若年性認知症の問題も出てきた。これは急に今、社会の問題になり始めていますが、昔からあったのです。この表を説明するのに一番説明しやすいのは実はDVなどの問題。わかりやすいのはDVです。ドメスティック・バイオレンスです。ドメスティック・バイオレンスという意味は皆さん知っていますよね。だけれども、30年前も生きていた人は、30年前、知らなかったのです。言葉がなかったんですね。ではドメスティック・バイオレンスが私たちの社会になかったかということ、そうでないです。あったのです。あったのですけれども、社会的には認知されていない問題だと、ここのゾーンだったのです。

実は私たちの社会課題というのは、今はここのゾーンの社会的認知を超えていますから、

例えば社会全体の課題になっています。例えばDV防止法という法律をつくることもできましたし、行政もそれに対して予算をつけて相談窓口をつくったりできるわけです。要は社会全体の問題になったら社会全体が動ける。当たり前です。ただ、昔の30年前のDVは単なる夫婦げんかと私たちの社会は言っていたわけです。夫婦げんかには税金は出せないです。そういうふうに私たちの社会の課題は移ろっているんだということ。

今、例えばここのゾーンにある問題に対して、行政はお金を出せるか。出せないです。では誰が支えるかという、みんなで支えなければいけないのです。まさしく共助の社会です。行政というのは税金を使ってやるわけですから、正当性がない。要は議会で議決されないとだめなわけです。夫婦げんかではないかと言われている時代は難しいわけです。これは色々な問題をさかのぼっていけばそうですね。例えば女の人が高等教育を受けるということも、昔は女には高等教育は必要ないという社会の方に対して抗った人たちが、そんなことはないと思って私財を投げうって学校をつくることから、徐々に今の当たり前がつくられていっているわけです。

そういう観点でいくと、実は私たちが今、こうやって急激に社会が変化していく中で、ここの部分をどうやって支え、どう充実させていくか。人のつぶやきやしんどさみたいなものをどうやってみんなで解決していくかということが非常に大事になってくる。これは先ほど申し上げた財政問題だけではなくて、原理的にもと言ったのはそういうことです。課題が何か出てきたときに、行政、何やっているんだと言って行政を非難しているだけでは、何の解決も生まない時代にどんどん突入していっているということです。そういう中でNPOや市民活動、企業のあり方が大きく変化をしなければいけない。これは大胆に少し大げさに言うと近代のつくり直しなのではないかとさえ思うわけです。

ある意味でパラダイムの転換という言い方かもしれませんが、わかりやすいのは、ある意味で近代のつくり直し。今まで全部をなくすということではなくて、今はもう無理が来ている。色々な無理が来ているところを見直していきながら考えていかなければいけない。その中で例えば今の地方創生みたいな話も、東京一極集中からと地方の関係どうやって見直すのかみたいなことも議論していかなければいけないでしょうし、もっと言えば先ほどのような人口減少や人口の急激な変動をある意味でチャンスとして捉えて、地域の構造を変えていく。例えば暮らし方や生き方、働き方などそういうものを変えていく、地域のことを変えていくチャンスだと捉えるべきなのでしょうね。

例えば高齢者の数が増えていく。今の私たちの考え方は、高齢者の数が増えると社会保障の金額が多くなって、1人で1人を支えなければいけない社会が来る。悲劇だ。年金もないみたいな発想ばかりですけれども、そうではなくて、その構造自体、変わらざるを得ないわけです。いかに楽しくハッピーに元気な高齢者を増やししながら、その人たちが働けるかとか、働き方みたいなものとか、みんなが笑って病院にたまらなくてもいいような構造をつくって、社会保障費を下げていくかということをもみんなで考えなければいけない。実際にそういうことは色々なところで実践が行われていますし、そういうところから私た

ちは学ばなければいけない。

そういう意味では地域は誰が支えるのか、公共性を誰が維持していくのかという観点で考えると、みんなやるしかないということですね。そういうようなことをこういう人口が変わって行って、かつ、地方創生みたいな話が出てきて、そういう構造の中で考えていかないと、こういうことを実は危機感を持った町はどんどん考えている。今、田舎がおもしろいです。あんなにダイナミックに色々なことが起こっている。

これは実は先ほどの数値を見てもらってもわかるように、今、中山間地域や過疎地域という形で買い物難民の問題や、移動の足がないとか、色々な課題をみんなが色々な形で知恵を出し合って解決しようとしていることが、実はこの近い将来、都市部を襲うということです。そういうことを私たち、地域は誰が支えるのかということで行くと、当たり前ですが、みんなで支えなければいけないということだと思います。

そこでよく協働という言葉が出てくるわけですが、これも役所が余り協働、協働言い過ぎたので、協働が実は目的化しています。かなり目的化している。協働というのは行政の事業を市民と一緒にやることなのです。かつ、それも協働推進をしている部局の事業を市民にアウトソーシングすることになっている。本当は違うのです。もう総力戦だから、ある意味で大きな行政改革や自治の改革として色々なものを、例えば水道管の維持といった話も含めて、みんなでどうやっていくかということを考えなければいけない時代。水道局は協働のセクションではないから協働と関係ありませんとなってしまっているのです。そういう意味で目的ではなくて手段なわけです。これをもう少し、言い古された言葉ではありますが、マルチパートナーシップといった、要は行政と市民だけではなくて地域の先ほど総力戦だと申し上げました。地域の色々なマルチ、色々な人たちがパートナーシップを組んで町のことに当たる。そういう関係性をつくっていかなければいけないと私なんかは思います。

きょう、後でも少し議論があると思いますが、その中の1つの方法として例えば円卓会議という方法が今、色々なところでとられています。滋賀県のこの場でもそうですし、私も少しかかわらせていただいているのは、東近江市なんかもこういうものを町の課題解決の中核に置いて、市民の皆さん方が一生懸命頑張ろうとされています。

円卓会議というのは、マルチステークホルダープロセスと書いていますが、例えばここに少し説明を書いていますけれども、多様な主体が積極的に参加して運営するお互いの力や課題を共有しながら対話を積み重ね、協働できる地域社会の実現を目指す場だと。例えばこれはどういうことかということ、課題を共有する。こんなことがあるんだというつぶやきを市民の人たちがぼつと言え。遊びに行く場所がないんだよなとか、1週間誰ともしゃべる人がいないんだよなというつぶやき、これはかなり大きな問題かもしれないですね。そういうある意味での課題を共有したり、悩みを共有したり、そして情報を共有したり、取り組みを共有したりするようなことを、色々な立場の人たちが一堂に会して話し合う。

これは話し合うだけではなくて、課題解決の取り組みにつなげていくということです。

例えば沖縄の事例では沖縄で離島で台風のたびに停電が起きる。これは今まで当たり前でみんなあきらめているわけです。それは当たり前だから。だけれども、先ほどの当たり前を疑うという話でいくと、台風が来て電気が切れるとどういうことが起こるかという、誰かがお亡くなりになるのです。我々のリアリティではないのですが、それは何かというと、その島にある小さな診療所の電気も消えてしまう。自家発電もそんなに長くもたない。そうすると人工呼吸器をつけている人は死んでしまう。そういうことが起こっています。それはその町の人たちにとっては当たり前だったのです。だけれども、みんなでそれってどうにかならないのかというのをみんなで集まって、その島の人たちが集まって、議論をする。そうすると電気屋さんは、うちは電気のことだったら何かやれるかもしれないなと思、自動車屋さんは、バッテリーはいっぱいあるぞ。自動車の廃バッテリーはいっぱいあるぞ。あれは何かできないのか。ではこうやってみんなが協力して、そういうものを集めて実験してみよう。変電気どうしようか。ではうちのつき合いがあるおじさんがそんなに好きだからつくってもらえるかどうか聞いてみようとか、色々なことがそうやってみんなが情報を持ち寄って課題を、それってどうにかしたいよねと思った人たちが集まることで解決の取り組みができる。それでそういう仕組みができました。

そういうある意味で先ほどの認知症の人なんかもそうですね。今から地域の中でどうやって見守っていくんだという話のときに、行政どうにかしろとか、そういうものでは済まないのです。そういうときに自分たちで例えばひきこもりの子供の問題でもそうですし、精神的な課題を抱えた人の問題もそうです。そういう人たちを孤立させる、排除させるのは簡単ですが、本当にそれで問題解決するのかどうか。そういうふうな私たちが今までの意味で税金を払っているのだから、行政やっておけという問題をみんなで解決していく。そういう課題解決の取り組みにつなげていくような円卓会議という手法が今、とられている。

そうすると、どういうことが変わっていくかという、例えば支援のあり方も変わります。支援というものの自体が例えばよく行政なども中間支援とよく言ったりする。ではNPOを支援しますとか、ボランティア活動を支援する。今はどちらかというところにあるものを応援するというのが支援なのです。要は例えばボランティア団体を支援する。だけれども、こうやってみんなで解決していこうとすると、こういう何かをつくり出さなければいけないかもしれない。そういうところでどういうふうに例えば支援というものを寄り添わせることかできるかといったことが、先ほど内閣府の坂井さんの報告にもありましたけれども、営利、非営利を超えていく可能性があります。地域の中で例えばお商売されている方々は町のことを全然考えていないかという、そうではないです。まちづくりの活動をかなりやられています。自分の町の中でぼろもうけしようと考えている中小の事業者さんはそんなにおられないです。まさしく三方よしみたいな考え方というのはかなり今、色々な経営者の中でも浸透しているし、もともとそういうものなわけです。

そうすると先ほどみたいに電気屋さんがとか、自動車販売店の人がというようなことは、

実はNPOだけが地域のことを考えるわけではなくて、地域やローカルという観点でいくと営利、非営利を超えていきながらみんなで取り組むことができるということも出てきました。

そういうことが起こっていくと、実は行政のあり方も変わっていきます。変わらざるを得なくなります。例えば計画をつくる。行政計画、総合計画というものを、こういうふうなことがどんどん色々な地域で色々な人たちがやり始めていくと、地域の課題って何だというものを例えば学識経験者ら何かが集まって審議会をつくるみたいなやり方も、やらなくてよくなってくるかもしれないわけです。要は町の人たちの声の聞き方や取りまとめの方法も変わってくる可能性がある。そこさえも疑う必要があるということです。本当に学識経験者たちが自分たちの町のことを知っているのか。そういう意味でいくと、自分たちの地域のことは自分たちがやる。一番知っているわけだから、逆に言えばそういうことを自分たちが発信したり、自分たちがこうやって共有をすることで、それが自分たちの町の合意形成につながっていくとか、自分たちの町の幸せにつながっていくというようなルールづくりも含めて、変わっていく時期なのだと思うのです。こういうことが実は大きな町で考えるとなかなかイメージが付きません。小さな町だとどんどん起こっている。要は今までの形では乗り越えていけないわけです。そういう中である意味で変わっていかざるを得ないということが出てきたということです。そういう意味では当たり前を超えていく。今の当たり前。当たり前というのはあきらめも入っています。これはこういうものだからあきらめろ。そうではないことも含めて超えていくことが総力戦の地域づくりだと思います。課題を解決して超えていこう。そうしないと、幸せな社会というのはつくれないのではないかとさえ思うわけです。

私自身はそういう課題解決のプロセスの中に、例えば先ほどの円卓会議で議論したのですが、お金がないのです。お金がなくてできない。先ほどの坂井さんの報告でも、私も資金面の課題に関するワーキンググループの取りまとめ役をさせていただきましたが、お金という問題は実は地域の社会の中でもかなり重要なことです。課題解決をやっていく。今、行政が補助金をどうにかしろとか、助成金だとかという話になるのですが、これも先ほどあったように寄附みたいなものを引き延ばしていかなければいけません。もう少し大胆に捉えれば、地域の中でお金を循環させるような構図をきちんとつくらなければいけないということです。地域にお金がないわけではなくて、地域にはお金はあるのです。

例えばこれは水俣の循環の図です。水俣市は大体1,088億円ぐらいの域内総生産です。そのうち実はエネルギーの代金に86億円使っています。これは域外に出て行って、中東に出ていたりする。自分たちが稼いだお金がどんどん域外に出る。実はこういう消費、市民が消費するものも休日の消費の約5割は域外に出ている。これは何かというとファミリーレストランなどでご飯を食べる東京資本のところにどんどん吸い取られて、結局、自分たちが稼いだ金は域外に出ている。もっと深刻なのは、地域の金融機関に預けた自分たちのお金が大体水俣では1,000億円以上集まっている。預金されている。これの7~8割が域外に出ている。700億から800億が域外に出て行ってしまっている。これは本来、自分たちの

地域にあるものなのです。だけれども、これは何かというと、結論から言うと国債を買っているビジネスモデルになってしまっているわけです。地域の中で、地域が必要な事業に投資をしたりという構造ではなくて、これはどんどん国に、国債に吸い取られる。こういう構造自体を疑っていくということです。

今、コミュニティービジネスやソーシャルビジネスといったことが言われています。もっとももっとそういうものが盛んになって、こういうお金が国債に回るのではなくて、自分たちの町のそういういったビジネスに回っていくと、雇用の問題だってかなり改善される可能性があります。消費もそうです。消費だって実はちょっとみんなが意識すると、この1割でも域内消費に変えられると、それは域内の自分たちの町をぐるぐる回るわけです。私たちはそういうことを余りにも無関心でいたし、そういう構造の中で生活してきてしまったわけです。そういう意味ではこういうことも含めて考える。

これは実は都心で生活しているとなかなかイメージしづらいですが、結構こういうことを意識している。今、全米の人たちが一番住んでみたいという町がポートランドという町。その町に行くと、基本的には欧米の社会でクレジットカード社会ですから、どこに行っても100円のものを買うのでもクレジットで買う人たちですが、クレジットカードやめようねというステッカーが色々なところに張ってある。それは何かというと、自分たちの域内の消費が要は1回それはどこかに行って、日本だと東京に行って、手数料を取られて地元の町に振り込まれるわけです。その手数料分、域外に出てしまう。1割ぐらい出てしまう。もったいないよねという発想。だから現金決済しようよということ呼びかけていたり、ポートランドという町は御興味があったらぜひ、今かなり日本でもはやり始めている。ダウンタウンには大手ハンバーガーチェーン店が1軒ありません。アメリカなのに。それは自分たちの町にはそういうものは必要ないとまちづくりの中でみんなが決めているから。そのかわり個人で経営されている、地場の人たちが経営しているレストランが山ほどある。そういうふうな地元の野菜を使って消費していくサイクル、かつ、都市と農村の線引きをきちんとしながらそういうものが循環するような、要はこういうふうにぐるぐるお金と人と資源が循環するような仕組みをデザインしていく。それが今アメリカでみんなが住みたい町No.1になっている。

私なんかアメリカ人というと、大ざっぱで大量使用費でばっつくって、ばっつ物を捨てているようなイメージがありますが、実はアメリカ社会なんかもしかしたら気づいているのです。リーマンショックやサブプライムローンなんかを通じて、もう大きく社会が気づき始めているのです。

そういう意味では私たちの日本の社会も、こういうお金の流れみたいなものを先ほどのような課題解決のところに寄り添わせていくようなビジネスモデルや取り組みをどんどん生み出していくことによって、今まであきらめていたりとか、しようがないと思っていたりとか、これってどうにもならないよねと思っていたことが、もしかしたらみんなの手で解決できるかもしれない。そのほうが住みやすいではないですか。これが解決すればなど

思っていることをみんなが議論したり、みんなが取り組むことで解決できた。それは住みやすい町に、もしかしたらそういう取り組みが未来の町の各価値を決めていくのではないか。まさしく共助型の社会、こういったことを私たちは取りまとめて共助型の社会と言っていますが、共助型の社会というのは何もNPOを応援しましょうという話ではなくて、NPOや市民の活動を核としながら、私たちの社会の課題を一つ一つきちんと解決していきながら、本当に豊かな社会をつくっていきましょうという取り組みにつなげていきたいと思えます。どうも御清聴ありがとうございました。(拍手)

○司会 深尾様、ありがとうございました。

続きまして、事例紹介に移ります。「つながりで支える地域福祉に根差したNPO活動と農業を生かしたコミュニティービジネス」について、長浜市の特定非営利活動法人集、理事長の川村美津子様より事例紹介をいただきます。

集いは、もっと柔軟に自分たちでできることがしたいとの思いから、平成23年1月設立されました。介護保険事業と福祉農園を中心に地域拠点づくりに取り組まれております。

なお、質問につきましては、本日お配りしています質問票に質問したい内容を御記入の上、前のボックスに入れていただきますようお願いいたします。

それでは、川村様、よろしく願いいたします。

4 事例報告

「つながりで支える地域福祉に根差したNPO活動と農業を生かしたコミュニティービジネス」

特定非営利法人集

理事長 川村 美津子

皆さん、こんにちは。今やっていることを皆さんにちょっとでもわかっていただけたらいいかなということで、日々の実践の報告をさせていただきます。しばらくおつき合いをよろしく願いいたします。

こちらがうちのキャッチフレーズなのですが「ふしぎのご縁の出逢いをたいせつにしたい」とつけさせていただいています。

今日のテーマをこのようにいただきましたので、日々の私たちの業務の中でやっていることを、しばらくおつき合ください。

私、川村美津子と申しますが、介護ヘルパーやケアマネジャーなどを30代後半から始めまして、色々な高齢福祉の業務に従事をさせていただきました。平成18年、長浜市の地域リーダー養成講座や新長浜創造懇話会に参加させていただく中で、まちづくりに目覚めてしまいました。平成19年に地域づくり協議会、私どもの地域では西黒田ふるさと振興会議という名前なのですが、こちらの福祉保健部会に所属をさせていただいて、活動を今日までさせていただいております。その中で2011年にNPO法人が必要だなということで、集という名前で設立をさせていただきました。見た目どおりの年齢で、地域こてこての密着型が大好きな湖北のおばちゃんのお話ということでおつき合ください。趣味は歌うこと、しゃべること、読書というふうに挙げさせていただいております。

こちらの写真の、長浜の閉庁式のときに藤井市長と一緒に撮らせてもらった1枚。右側のほうは先週、今日もボランティアさんで来てくださるのですが、長浜市立湖北病院へ後ろにいらっしゃるドクターと看護師さんと一緒に、三線のコンサートということで寄せていただいたときの1枚を挙げさせていただきました。

長浜市の紹介をさせていただきます。長浜市西黒田地域はちょうどこのあたりになります。長浜は大きくなりました。南の隅っこ、こちらが米原市になります。ここをちょっと大きくさせてもらおうと、こんなふうに緑のところは山なのですが、山の懷に抱かれたような地域です。

これを文章に変えます。1としましては、長浜地域の南東部、米原市と隣接する9km²、人口は11自治会でこんなような感じで、高齢化率は30%を超えて久しくなりました。景観集落は先ほど見ていただきましたように、集落が点在しており、七岡や美田が広がっております。まちづくりは金太郎伝説、七岡伝説など、歴史的な遺産を生かしたまちづくりを進めてまいりました。ここがその地域づくり協議会西黒田ふるさと振興会議の拠点でありますところの西黒田公民館の写真です。金太郎さんの像と、こちらが今のキャッチフレーズの金太郎さんのマークになっています。

まちづくりには歴史がございます。平成11年から金太郎の里ということで色々な活動をされてきています。金太郎サミット。全国に金太郎さんの民話のあるところがたくさんございまして、そちらが集まったのサミット。また、連合自治会での活動も活発であったり、ボランティアの意識が高かったりという部分。これは皆さん子供たちが相撲をとっているところなのですけれども、金太郎相撲大会のようなことも年間を通して色々な行事として組み込まれています。

転倒予防教室も今100回以上の開催となっております、住民の介護予防に対する思いも大変強いものがございます。具体的に挙げましたものがこちらの写真です。平成22年度から長浜市さんの事業委託を受けまして、終了しました後は、ふるさと振興会議の地区社協部会の自主事業ということで開催をしております。現在130回を超え、1カ月に2回、土曜の午前、こちらの特徴、結構体操教室というのはあちこちでされているのですけれども、送迎をさせていただいています。9km²の中を幾らいいことを公民館でやっても、足がない高齢者の方はたくさんいらっしゃいますので、送迎させていただくこと、あと、体操だけではなく、年間を通じて楽しいことを盛り込んでいくということで1年間を通じて色々な方、駐在さんとか自動車屋さんとか色々な方がかかわってもらっての事業展開を今しているのが特徴かなと思っています。

こちらFacebookのお友達の方は知っておられるのですけれども、毎日朝から晩まで西黒田と言いながら、西黒田の写真をアップさせていただいています。こちら地域から見える霊峰伊吹です。こちらは本庄町の足柄神社という金太郎さんが相撲をとったのではないかという伝説のあるところがうっすらとした雪化粧、本当に美しい、ここにはおさめ切れなほどたくさんデータがあるのですが、日本で一番いいところで、一番パワースポットのところだと思って私は暮らしています。

そんな中でNPO法人を立ち上げました。公民館の福祉活動の中では社会教育部門が強いので、収益活動をしてはいけないということがありましたので、長続きしようと思ったらもうけさせてもらうことと、もうからないことと2足のわらじを上手に回していくことが必要ではないかというところでNPOになりました。たちまち、私がケアマネジャーでしたので、ケアマネジャーの事務所なら何とかお金がなくてもできるかなというところから始めたのがケアプラン集です。NPOにする前に1回株式会社にしようかなと考えて、株式会社で判こをつくったのですけれども、色々な方に相談させてもらったら「あんたがしたいのはNPOや」と言われて、判こを削り直していただいてNPO法人にしたというおもしろい歴史がございます。

そんな中でケアプラン、農園事業、日中一時預かり事業、空き家を通じての事業を始めさせていただいて、23年10月にはデイサービスという形で、目の前にあることを次々していったらこんな形になったという形で動いてきました。

これが今、申しましたケアプラン集のところなのですけれども、今までケアプランを立てさせていただいた方は3,000人を超えています。また、地域に提案事業ということで職員

がアイデアをたくさん出してくれることをやっています。認知症カフェも職員からの提案事業で始めています。随時対応で相談窓口、あの嫁さんがこんな言いだったということから、色々な相談を受けさせてもらっています。

この中で皆さんに見ていただきたいなと思ったのが、こちらRUN伴湖北。RUN伴というのは今4回目、北海道から去年は広島まで、認知症の方も一緒に最後まで住み続けられる地域づくりということで、たすきをつなぐリレーに滋賀県で参加させていただきまして、うちのほうは湖北の担当ということで、敦賀市から彦根城までランナーさん33名、ボランティアさん100名ということでさせてもらいました。本当に色々な方がかかわってくださって、こちらはスタートの福井の敦賀市でのこれから走るぞというところですし、こちら長浜市の藤井市長、健康福祉部の部長さんや包括のセンター長さん、子供たちも一緒に走っているところ。まだ一部オープンの長浜庁舎のところで、たすきの引き渡しイベントでたくさんの方のゆるキャラさんも来ていただいたというところ。また、中継地点では若者にもバイクランで協力してもらって、これは西浅井の道の駅なのですけれども、道の駅をあげて応援してくださいまして、本当にありがたかったです。

こちらは彦根城、観光客の方も最後のダンスには加わってくださいました。次の彦根担当の方に私がたすきをかけて、お願いしますと言っているところなのですけれども、本当に目の前に来たことを一生懸命やっていくと、ありがたいことに色々な方が協力してくださって、これが協働なのかなという感じのことを今やっているのかなと感じています。

こちら提案事業の金太郎つどいカフェ。認知症カフェと言うと、認知症の方だけというイメージになるので、一応どなたにも来ていただきやすいようにということで、このような名前を相談して決めています。こちらが公民館のホール、手づくりの看板、駐在さんが質問しているところ。ケアセンターの先生が答えているところ。地区社協の会長さん。今日来てくれていますけれども、石窯づくりの師匠やスタッフが皆さんにピザを焼いているところです。パティシエさんや皆さんがしゃべってくださるような、ほのぼのとした空気の場面がたくさんあったのが素敵でした。

続いて、金太郎農園なのですけれども、地域にあるものを生かそうではないか。会社なりにやろうということで、さつまいも農園なら手間がかからないのではないかとか、つどい庵をやっているから利用者さんの生きがいつくりにもなるのではないかとか、お子さんとコラボをしたい。また、住民さんの顔が見える事業をしたい。空いた農地をあちこちいっぱいあるなというあたりから、これは何とかならないかなと始めたのが金太郎村農園です。

こちら輝く農業高校生と書きましたが、皆さん見てください、この笑顔。本当に校長先生に見てもらったら、「あなたのところの農園に行って、うちの生徒こんなええ顔しているんかいな」とびっくりしてくれるのですけれども、こちらのほう、いつも収穫には地域の子供たちと一緒に幼稚園の子たちも入っていただきます。初めはとても照れてシャイな高校生たちが、自然に子供たちの間に入って一緒にお世話をしてくれる。そこには色々な高

高齢者の施設とか、色々なところに声をかけてくれる人と一緒になってやってくれる。

そして、赤ちゃん回し体験をしてもらいました。初めて赤ちゃん抱っこでふわふわして怖いなど言いながら出してきて、順番に赤ちゃんが回っていかれたのですけれども、すごい独特のいい空気だったなと思って今、思い出しても胸が熱くなります。

次のスライドなのですが、お子さん連れのお母さん一生懸命、いもを見たらいもしか見ていません。赤ちゃん放ったらかしですね。見たら赤ちゃん靴を食べていまして、ここの高齢者の間にちゃんと置いて、「何食べてるんや、わしらが見たろ見たろ」と言って赤ちゃんの子守りを始めてくれた。これがいいのかな。0歳から99歳までが同じ土の上に立つ、これが大事なのではないかということをおもいました。

これはつどい庵の外観です。ここで通所の事業やたくろうさんと言いまして、介護保険外の方のお預かり事業、また、集いキッズ事業ということでお子さんのお預かりの事業をさせていただいている、うちの今のところの拠点であります。

この中でしていることなのですが、特技の継続ということで、こちらうちの習字の師匠です。とても達筆で、今、地藏盆にはこの施設は解放しますので、今、看板は専門で認知症のカフェとか、何でも看板づくりをしてくれまして。こちら小さいお子さんを見ながらプランターの世話をしてくださったり、自分たちのお昼ごはんやおやつを手づくりで農園でとれたものをしてくださる。これは包丁を持ったり鎌を持ったりということがうちは日常茶飯事なのですが、スタッフだけではとても足りません。ボランティアがかわるがわる来てくださってフォローをしていただく中で今、このような事業が普通にできているんだなと思って感謝の思いでいっぱいです。

つどい庵、ここがデイサービス？子供らに教えて教えられて、子供たちに教えてくれることと、また子供が教えられることと、職員が束になっても子供の笑顔には勝てませんということが今、4年間こういう事業をやってきた中で私たちが気づかせてもらったことです。

こちら来週は味噌づくりウィークで、今度はネット販売をしようということになっておりまして、今、味噌づくりに取り組みさせていただきます。子供たちとても楽しそうなのです。大きな桶ではんぼうの中を回したり、また、この顔を見てください。確かにおもしろいのです。回してにゆるにゆるっと豆のつぶれたものがこちらから出てくると、本当に味噌ってお豆さんがこんなになってできるんだな。そして半年たって自分たちのつくった味噌を食べるときの喜びというのは、和食離れとかご飯離れ、こんなところから防げるのではないかという感じで思ったりしています。

西黒田の自然の恩恵を受けて、うちは先ほど言いました七岡はたくさんの自然に囲まれています。これは花山椒と粒山椒を摘んでおられるところなのですが、これでまた田楽の味噌にしたり、佃煮にしたりして呼ばれます。こちらは農園の隅っこにさくらんぼの木が2本あるので、無我夢中で積んでいます。多少、青かろうが黄色かろうが、一生懸命積んでおられる。曲がった腰が伸びます。これは最高のリハビリではないかと思って見

ています。

今までしゃべらせてもらったものを、図にまとめるとこうなのではないかと思いました。豊かな多職種連携。教育機関といたしましては、みなみ幼稚園、小中学校、農業高校さんやバイオ大学さん。地域行政としましては西黒田ふるさと振興会議さん、長浜市さんは本当に色々な課の方とつながっています。また、福祉事業所ともたくさんつながっています。このようなところと、ここに書き切れていないところもあるくらいですけれども、医療機関のほうも色々なところと密な連携ができています。これがやはり一番うちの財産かなと思っています。

さて、地域活性化の目標はと挙げさせていただきましたが、これは私のつもりなのですが、けれども、何だろう。どうしたいのだろうと考えたときに、若者が1回出て、若者が戻ってきて、子供たちが生まれ続けてくれることではないかしら。人口が減らなくなることではないかしら。誇りを持って地域を残すことだと偉い人が言っていました。私もそのとおりだと思います。では、今ここで生きている私たちができることって何だろうと思ったときに、年間を通じて行っている、月1回ぐらい色々なイベントをして、お子さん0歳から99歳の色々な立場の方に来てもらってしている。それを日常化したい。いつもあそこに行ったら子供さんから高齢者までが何か楽しそうに、何か仕事しながらしているというのをつくりたいというのが金太郎村構想なのです。

さて、どんな村でしょうということと言いますと、子供から高齢者、障害者、誰もが集える場所をつくること。農業の振興、新しい産業をつくりたい。次の時代を生きる子供たちの役に立つようなシステムをつくりたいという辺で自立、未来型事業と名前を勝手につけています。

具体的にはといますと、たちまち農園活動なのですけれども、現在、平成26年、27年と近畿農政局さんから農のある暮らしづくりということで助成金を頂戴いたしまして、福祉農園の充実という形で今色々な方を農園の土の上に入ってもらって、農園づくりをやっています。その中で第6次産業への挑戦、それとくっついて農家、農業高校生レストランができないか。耕作放棄地をできたら元通り作物がつかれるような畑に戻したい。また、大型の農業者の方、一時に収穫できないし、一時に片づけできないし、とても手間が要るんだと言われたことを、こちらが作業の請負ができないかという辺を具体展開の1と挙げています。

2つ目は、この間教えていただいたのですけれども、今、日本はTPPに揺れておりますが、NPOはTTPでいけど。徹底的にパクレと言われましたので、なるほどなと思って、これは三重県の相可高校さんの高校生レストランの写真です。みんなとてもいい顔をして、はつらつとしている。やはりこれっていいよねということで挙げさせていただいています。

昨年夏、我が家に19歳の女子大生に3泊4日で泊ってもらって、ホームステイアルバイトをしてもらいました。一番喜んだのはうちのお父さんです。娘も構ってもらえませんが、若い女の子が「お父さん、おはようございます」って言うてもらいとめちゃくちゃ機

嫌がよくて、これだけでも夫婦円満の秘訣だなと思いました。若い方にいてもらうことは大事だし、バイトさんには交通費が出せないの、そんなふうに住み込んでもらった色々な方に来てもらって、100人に1人もしこの長浜で住んでもいいと言ってくれる人がいたら、これはすごいプラスだなと思って、私も彼女とその後、つながっていく中で幸せだなと思いました。

先ほども深尾先生から話がありましたけれども、高齢者が増えると何かマイナスの負が増えるような感じがしますが、本当に元気な人材となる高齢者の方に頑張ってもらったらいいのだろうし、それが大事なのだろうなと思います。また、障害を抱える方も、その立ち位置というか自分が役割を持ってもらえるようなことをしていくことが大事だろうな。別々のところで今まで障害者、高齢者、子供たちと分けてきたところを1つにするような産業が大事なのではないかと思っています。

そんな中でうちの辺、先ほど写真を見てもらいましたけれども、大きな木造のおうちが多くて、空いたお部屋がいっぱいあります。では、そこを生かして農家の民泊事業や修学旅行生、大学のゼミ生とか企業研修生の方を受け入れて泊まってもらえるようにしていかないかというのを今、西黒田ふるさと振興会議さんにも提案してやりかけようという福祉活動計画を立てました。

そんな中で、新しい拠点が欲しいなというふうになってきています。そのために金太郎村の骨太、認定NPOを目指すということで今、活動を続けています。一番初めにも触れましたけれども、収益事業と非営利の利益を生まない事業をうまく組み合わせることが大事だろうなと思っています。また、皆さんにも先ほど見ていただきました高齢者と子供の事業の組み合わせ、これも必須だろうなと思っています。

また、寄附活動がしたくなるような地域福祉に根差したNPO活動を、いかに透明感を持って、ここならわしの身銭を切っても次の子らに役に立つ、このふるさとがよくなるんだなとわかってもらうようなことをあきらめずにこつこつとねちこく、しつこく続けていくことが大事なんだなというのを思っています。

また、ボランティアセンターを組織づけていくことも、これからの次の介護保険法や医療保険法が変わっていく中では必要だということにも気づいています。また、今やっているつどい庵のサテライトを発信するという形で展開をしていきたいと考えております。

こちら金太郎村農園のブランド品をつくりたいと思っています。今、試作品ですけれども、これは金太郎さんのシールが張っていますが、のぼるちゃんの手前味噌、今日のぼるちゃん来ていますけれども、のぼるちゃんの手前味噌という名前をつけました。うまい米とか、LINEのスタンプをつくろうと職員が言っています。滋賀県立農業高校と色々な連携をして、金太郎シュークリーム、これは金太郎真桑をあんにできないかなと。あと、金太郎モンブランは金太郎村農園でつくったさつまいもをあんにしてモンブランにできないかなとか、わくわくするようなアイデアがいっぱい出てくるのがブランドづくりです。

初めて中長期計画を立てました。平成27年、今年なのですけれども、年商1億を目指し

ています。職員数は50名になる予定をしています。これはクリアできるのではないかと私は思っています。平成32年には年商10億、サテライト拠点は5カ所、職員は100名以上という、さもうかっているというイメージかもしれないのですけれども、もうかることはないにしても、職員さんが食べていれる給料がきちんと出せる法人になりたいというのは夢として持っています。

平成37年は、本当はここに年商20億と書いていたのですけれども、横着かなと思って「…」にしました。人を育てることはとても大事だと今、気づいています。特に働きにくいと思っている若い育児世代のお母さんに何人か来てもらっています。その人たちは遅く出社したり、早く退社したりですけれども、この方たちを雇用してどんなことをしてほしいと聞くことで、法人事業のモニターとしての役割を大きく果たしてくれます。

きのうも若い職員さんとしゃべっていたら、次はマルシェをやしましょう。食育も含めたマルシェをしてくださいというので、なるほど、次はテントだなと言って調べているような感じで、次々とみんながいいアイデアを出してくれて、それを拒否しないことが私のお仕事。あと、そこに色々なお金をくっつけてくるのが私の使命かなと思っているところです。

今、集のサポーターさん、ファン獲得のために汗をかいています。ボランティアさんのポイントカードができました。若い女子がつくってくれましたので、15ポイントたまると表彰させていただきますという言葉をつくってくれたり、手づくりの消しゴム判こですけれども、金太郎さんとクマさんの判こをかわるがわるにポイントとして差し上げていく。また、利用者さんは利用者さんでポイントカードで活動してもらおう中で、地域マネーや農産物やイベントの参加料として交換するようなシステムをつくっていこうと今やっています。

うちなのですけれども、できることからやってしまおう。とりあえず動いてみて、やってみる。開かないならやめておこうということで、こちら今LINEスタンプの原型をつくりかけてもらいました。金太郎さんと熊さんが長靴をはいたり、金太郎さんが鮭を食べてよだれを垂らしたり、色々なアイデアを出してくれて、こんなことを今やって、色々な年代の人が楽しめるようなことができるといいかなというのが、NPO法人集です。

これもパクリました。ダーウィンの進化論。最も強い者が生き延びるのではなく、最も賢いものが生き延びるのでもない。唯一生き残るのは変化できる者であると聞いて、本当だと思いましたので、ここに挙げさせていただきました。

本当に皆さんの貴重な時間をいただきありがとうございました。金太郎さんとともにお別れにさせていただきたいと思います。(拍手)

○司会 川村様、ありがとうございました。

それでは、ここで一旦休憩とさせていただきます。 なお、質問票は先ほどの基調講演、ただいまの事例報告に関しまして前のボックスに入れていただきますようお願いいたします。それでは、しばらく休憩といたします。

(休 憩)

5 パネルディスカッション

「社会課題解決のために、いかに『つながり』を生み出すか」

○司会 ただいまから、滋賀の地域円卓会議にかかわっていただいた皆様によるパネルディスカッションを始めさせていただきます。

本日はつながりがテーマとなっておりますので、NPOや企業、行政など多彩な方々に御登壇をいただいています。

それでは、パネリストの皆様を御紹介いたします。

深尾昌峰様です。深尾様は共助社会づくり懇談会委員でもいらっしゃいます。

次に、三重県梶賀町、漁師及び物語力出版代表、北田真規様。

先ほど事例紹介をいただきました、特定非営利活動法人集理事長、川村美津子様。

そして、協働推進委員であります滋賀県健康医療福祉部健康福祉政策課の沖野宏文様です。

最後に、ファシリテーターを御紹介いたします。特定非営利活動法人ミラック代表理事の西村勇哉様です。

各パネリスト及びファシリテーターの皆様のプロフィールにつきましては、それぞれのプログラムの中に入っておりますので、ぜひごらんください。

それでは、ここからの進行は西村様にお願いいたします。よろしくをお願いいたします。

○西村氏 御紹介に預かりました、NPO法人ミラックの西村です。

ここから進行をさせていただきます。

パネルディスカッションということでお題もいただいております「社会課題解決のために、いかに『つながり』を生み出すか」というタイトルをいただいています。

冒頭で深尾さんと川村さんは、プロフィール、自己紹介を兼ねたプレゼンテーションをいただいておりますので、まず沖野さんから新しく登壇していただいておりますので、簡単な自己紹介をしていただければと思います。

○沖野氏 沖野と申します。

私のプロフィールは先ほど遠藤さんから御紹介がありましたように、一番最後を見ていただければと思います。

そもそもなぜここに私がいるかというのを話しますと、協働推進員と書いてあるのですが、今年度から健康福祉政策課というところに来ておりますが、昨年度までは経営企画・協働推進室というセクションで協働というものをずっと担当しておりました。滋賀県は3年ほど前に県民活動を支援する、今日この主催の県民活動生活課と経営企画・協働推進室に分かれまして、私は職員向けの協働を推進するというミッションがありました。

先ほどの深尾先生からの御紹介があったように、協働を推進することについて考えたところ、そもそも協働の推進を目的化するのはおかしいのではないかと私は感じました。そのときにふと周りを見渡しますと、行政側からのアプローチになりますが、特に技術系の

職員を中心に、先ほどの川村さんのような動きをしている職員を何人か知っていたので、そういう人たちを表に出すため、協働推進員という制度を作りました。その後、私自身が異動しまして、協働推進員の立場で本日ここにいさせていただきます。

今日の話の中で1つありましたけれども、私の経歴にも書いておりますが、色々なセクター、例えば行政セクター、NPOセクター、企業セクター、というのは結構色々な動きが相互関係にあると思うのです。私の場合は民間におりまして今、行政の立場ですし、一方でNPOの立場というのもございます。結構そういうことに関わるが協働に取り組む人たちに多いなということについて気づきがありました。

真ん中の2ページの円卓会議の補足ですけれども、真ん中あたり、滋賀の地域円卓会議の枠組み、組織というところをご覧いただきたいのですが、昨年ちょうど私が前の職場にいたときに、当時の県民活動生活課の担当から相談を受けたのが、新しい公共支援事業の総括についてです。ここに書いていないのですけれども、NPOの中間支援をもっと強くしたいというのが今後、県の役割としてありました。これは各行政機関、特に県とか、今でも市町長の担当が一生懸命中間支援をどうするかということで悩んでいたのです。

ただ、今、NPOだけの中間支援というものではなくて、一部は行政が担う役割であったり、福祉の分野では社会福祉協議会ですとか産業支援だと滋賀県産業支援プラザ、それから、今日来られていますけれども、NPOの中間支援である淡海ネットワークセンター、それぞれの分野の中間支援の人たちがまず集まって、何かそういう場をつくろうということで今回始まっております。

さらに座長で来ていただいた深尾先生には、特に私も内閣府の報告書を読んでおりますので、そこに書いてあるものは日本全国どこでもあるような、共通的な課題ということになりましたので、今回そういうふうになんか入ってもらって何かしようかということで円卓会議という場を設置しています。

今、私は行政の立場で来ておりますが、企業でも同じかもしれないのですが、あるときには生活者の立場としてであったりとか、行政の立場でできないときには例えば川村さんのようなかNPOのほうに行く。先ほど深尾先生の講演で市民の領域と今までの協働領域の説明があったのですけれども、行政はこれまでの協働の領域というところだけ見ている、初めてそこで何か起きたらどうしようと言っていたのですが、逆に行政職員としても普段からそういうNPOですとか生活者の立場をとることによって将来起こり得る社会課題を事前に予測をして、必要に応じてNPOに働きかけるようにすれば今よりももっと社会課題を解決していけるようになると思っています。

以上で紹介を終わります。

○西村氏 ありがとうございます。

川村さんは先ほどお話いただいておりますので、北田さんに自己紹介をお願いいたします。

○北田氏 私は肩書きのほう漁師と書いております。三重から今朝やってきましたが、もはや意味がわからないと思います。何で漁師が今ここで話をさせてもらっているのかと

いう話は、はしょらせていただこうかと思えます。

取り組みとしては地域の資源というもので、新しいビジネスをつくっていこうということをやっけてきておまして、お金を生み出す仕組みであったり、お金を生み出す形をつくっていかないと継続してやっていけない。地域としても継続してやっていけないのではないだろうかということで、ビジネスモデルを企画するというものを仕事としてこれまでやってきておりました。今はただの漁師です。

今日は本当はかっぱを着て、長靴をはいて来ようかと思ったのですが、余りにも魚臭かったので普通の格好で来させてもらいましたが、きょうこれからのお時間おつき合いいただきますようお願いいたします。

○西村氏 私はミラツクの西村と申します。住んでいるところが滋賀の大津なので呼んでいただけましたが、普段は今日のテーマにも少し書いているのですけれども、セクターや職種、業種を超えた協力関係を生み出して、そこから社会課題の解決を加速していくというようなプラットフォームづくりを滋賀だけではなく全国、北海道から鹿児島まで地域を超えた協力関係をつくることに取り組んでいます。よろしくお願ひします。

深尾さんからお話をもらおうかなと思うのですが、ここのパネルのテーマが「社会課題解決のために、いかに『つながり』を生み出すか」なのですが、テーマをとりあえず変えたいと思います。

深尾さんのお話にもありましたけれども、つながりを生むのが目的ではない。社会課題の解決が加速することが目的だと私も思っています。ですので社会課題が解決するためにという観点でいくと、つながるといのはどうあるべきかというところを一度まず簡単に深尾さんの意見を伺ってから、その後、現場の話に入っていきたいと思ひます。

○深尾氏 ありがとうございます。

つながりをいきなり変えようと先ほど打ち合わせしたのですけれども、よくネットワークが大事だとか、つながりが大事だという話はよくありまね。だけれども、名刺交換して名刺の数を競い合う人たちがいて、俺はこれだけ名刺交換をしたとか、使えないネットワークだったら、ただのごみなのです。名刺交換をすることで満足をしてしまうことがあって、つながりって結局何か自分たちの共感をどうやって、共感をベースにどうやって結びついて、それが課題の解決であったりとか、何かやろうとしている人たちの応援ができるのかということの行動につながっていかないと、単なる自己満足なのです。

私なんかは最近、ワークショップとか結構色々なところでやっています。まちづくりのワークショップとか、あれも結局、自己満足なのではないかと思うことが多々あって、要はみんな話をしましょうと言って話をする。いい意見が出たね。終わり。最近、業者なんかもそういうことを対応して、私はアリバイ型の自治のような気がして、そういうものではなくて、そこを超えていきながら行動につなげていくためのつながり方とかネットワークのあり方みたいなものを少し考えていかなければいけなくて、地域の中でそういうこ

とをつないでいく人とか、つながり方みたいなものがどんどん失われているのか、まさしく一緒にやろうよみたいな言い方というのがどんどん少なくなっていて、NPOなんかで私が危機だと思うのは、同じようなNPOがいっぱいあるではないですか。何か客観的に私なんかはNPOをやってきた人なので理屈はわかるのです。NPO側の理屈がよくわかって、ちょっとしたイデオロギー的な対立とか、ちょっとした違いで新しい団体がぼこぼこできる。

これは中の人からするとよくわかるのだけれども、外から見ると同じような団体があって、同じように寄附を募集していて、同じようにボランティアを募集しているように見えてしまって、どこに自分は参加したらいいのかというのは結構わからない。混乱しているわけです。こんな実は少し超えていけることなのかもしれないし、お山の大将がいっぱいできてしまって、結局は自分がやりたいからやっているんだといった社会に移ってしまっているのではないかとすることは少し気になります。

だからある意味でそういうみんなと一緒にやろうよというような巻き込み力というか、一緒にやらないというふうな巻き込む力というのがどんどん地域の中で弱くなっていったり、結局お山の大将型の団体がいっぱいできてしまって、リソースが分断されて、そこは競い合いになってしまって、パイの取り合いのようになってしまっている状況を超えていけるのかみたいなことは、少し気にはなります。そういう意味ではきれいなのです。つながりやネットワークという言葉は誰も反対しないきれいな言葉なので、もう少しそご自体、掘り下げる必要があるかなと思います。

○西村氏 続けてもう一つ聞いてもいいですか。

2つ質問があるのでどちらでも。2つ聞いていただければと思うのですが、1つは意味があるつながりをつくるために、どんな勘所があるのだろうというのが1つと、もう一つは先ほどの例えば小さな団体がたくさん生まれてきて、リソースが分散してしまうというか、薄く広がってしまうみたいなことが起こっている中で、どうすればそれをもう一度再結集することができるのだろうということを聞いてみたいと思います。

○深尾氏 1つは支援、お金、先ほどの後者のところで再結集みたいところでいくと、誤解のある言い方かもしれませんが、例えばお金の力みたいなものはそういうものを再結集させる力があると思うのです。例えばお金を出す側と一緒にやろうよという言い方とか、この部分はこの全体でまとまってやってくれたら、こういう成果が出るのではないかと成果指標できちんと語りながら離合集散ができる体制というものは、実は支援をする側の言い方とか、応援する人たちの持っていく方みたいなところが実は非常に大事なような気がしていて、そういうもので実は編み直していく。

実は中間支援とか、行政もそうかもしれませんが、そういうある意味での統合化させたり、全部が全部一緒にやりましょうというのは気色が悪いので、ここの部分は一緒にやったほうがいいよねというふうな成果が見えているものに関しては、そういう意味での結集のさせ方といったものがあるのだろうと思うのです。ですから、そうするためには実は成果軸で語っていくというか、いいことをやるからいいんだということではなくて、こうい

う成果を生み出したいですねということを確認してから始めるというか、それを導くためにはこうですねというある意味でのロジカルなところから始めていくところの設定感といったものは、非常に大事なのではないか。今、振られて思いついたことを答えているので、真っ先に思いついたのはそこです。

○西村氏 そうしたら今度は川村さんにもお願いをしたいのですが、現場で組み込まれていて、実際に例えば他のセクター、大学や行政もしくは企業の方、もしくはほかの領域の方と協力をしたことによって、自分たちだけでやるよりも明らかに課題解決が加速したなということがあったら少し伺いたいと思います。

○川村氏 先ほども事例で見ていただきましたけれども、本当にもともと高齢の方の事業で始めたのですが、そこに子供や学生、障害のある方、育児中の方が加わることで、本当に住民の顔が見えるところから始まるのかなと思っているのです。それによって弱者とか生きにくいという言葉は余り使いたくないなと思うのですが、そこが見えなくなっているのが今の地域と言われているところの問題かなという気がしていて、その問題が見えるかなとったりしています。

○西村氏 つまり例えば高齢者の方だけで集まるのではなくて、そこに子供が加わることによって違うものが見えてくる。

北田さんに2つ聞きたいことがあるのですが、1つは純粋に前半、プレゼンテーション、深尾さんと川村さんと聞いていただいて、その感想を聞きたいというのが1つと、もう一つは先ほどおっしゃってくださった地域の資源を活かしてビジネスをつくる。その観点から見たときにセクターですとか、領域を超えて協力関係が生まれるということにどんな意味があるのか。もしくは実際にこういったことが起こってきたからビジネスまでつながっていったんだといったことを聞きたいなど。

○北田氏 まず基調講演を聞かせていただきまして、単純に面白かったというのもあったのですが、深尾先生のほうで示していただいた図がありましたね。あの図がすごくわかりやすいというか、本当にまさにそのとおりでなと思ったのです。あの図も市民活動としてやるべきだという下の部分。あの部分をやっていくときに誰がそれをコーディネートするんだろうというのがすごく一番大きな問題なのかなというのは感じましたし、そこを例えば行政がするのか、コーディネーター的な人がやっていくのかということで、少し形は変わってくるのかなというのがすごく感じました。

NPO 法人集さんの部分でいきますと、今、本当に色々なことをされていてすごい楽しいと思うのです。これは、私は地域と一緒に何かするとき、私の中でもルールにしているのですが、とりあえずやっている自分がめちゃめちゃ楽しそうにする。とりあえず何か楽しいからおいでよといって人を集めるのではなくて、集まる仕組みを先につくることで、結構活動というのは変わってくるのかなとっていて、だからすごく楽しそうにお話されているのを聞いて、そこにはきっと人は集まるのだろうなというのが感じました。

地域の資源という言葉でよく使う言葉なのですが、結構地域の資源って何だろうという

のは皆さんワークショップで探しに行ったりとかすると、何かつくろうとするのです。例えば先ほどのお話の中にもあったような、おいもが採れます。ではおいもが採れるからそのおいもをつくって何かをつくる。もしやっている人がいたら気を悪くしないでくださいね。物すごく多いのはブルーベリーを育てますとか、いちご農園がありますとか、みかんがありますとか、結構すぐジャムをつくるのです。色々なところで自家製のジャムですというものをそういう切り口でつくるのですけれども、ジャムをつくるのはきっと課題の解決ではないと思うのです。そのつくったジャムをどう都市部や一般のユーザーに売っていくのか。そのジャムを売ったときにそのジャムをつくっている背景をどうやって見せていくかという仕組みをつくることで、初めて課題の解決ができるということだと思っておりますけれども、よくあるのはジャムをつくって道の駅にぽんと並べたら、うちの地域の課題は解決した。そういうのは結構あると思うので、そうではなくて末端の一番最後のユーザーが創造できる環境をつくるというのがすごく大事なのかなと思うのです。

今、私は漁師をさせていただいているのですけれども、私が今、住んでいます三重県の尾鷲という町はヒノキ、尾鷲檜というヒノキ、林業が盛んな町で、漁業が盛んな町なのです。今、漁師をしながら山も行っているのですけれども、これに携わる1次産業の人間、私の両親もそうなのですが、林業で言うところの木材、製材所の方々というのも、これは職種としてなのですが、お客さんが全部末端の一般のユーザーではないのです。私たち漁師は魚をとってきています。私たちが魚を売るのはお客さんではなくて仲買です。仲買に売ることによって私たちの仕事は終わっていくので、各家庭に持っていく魚を食べる人というのは誰も想像しないですのです。

地域の資源というのは実は魚は魚なのですけれども、私たち漁師が自分で食べる魚とか、自分の友達に食べてもらう魚というのは、船の上でちゃんとしめるのです。これは皆さん知らないと思うのですが、船でとれたての魚の血を抜いて、神経を抜いてきれいに保存するのです。これは何ですかというと、そのほうがうまいのです。

私たちは顔が見える人が食べる魚は、ちゃんと処理をする。でも仲買という間の人、お客さんではない食べない人に売るから普段はその仕事をしないのです。もしかしたら漁師一人一人が想像する、この人が食べるという顔は1人につき100人ずつ思い出すと、その漁場でとれる魚は物すごい資源になるのではないかと。それを仕組化していくというのを今ぼちぼちやろうかなと思ってやっていたりするのですけれども、結局はもともとあるものをどのように価値をつけていくか。その価値をつけるときに考えるべきことは、何か足りないのではなくて、何がどう変わったら何かわかるのだろうかという仕組みの部分の突っ込んでいくほうが良いと思うので、何かをつくるというような観点では、私のほうは新しい仕事をつくっていくというのをしているような感じです。

○西村氏 今の話の中で、私は最後に届ける人をどう想像するかといったところが面白いなと思ったのですけれども、魚を食べる人を想像したときに行動が変わるわけですね。その変わる行動みたいなものと課題みたいなものがひもづいている場合に、きっと課題は動

き始める。

あえて沖野さんに振ってみようと思うのですけれども、一見、現場から離れていそうな行政みたいな感覚が一般論としてあるときに、行政と現場で起こっていることの最後届いてほしいところへの想像みたいなものは、どうやったらつながっていくと思いますか。もしくは実際にこういったやり方でつなげていっているということがあれば知りたい。

○沖野氏 私が仕事をしているのは県の立場ですけれども、県は行政からすると住民からかなり遠いわけです。今まで私がしているところからまず言いますと、先ほども自己紹介のときに御説明をさせていただいたとおり、24時間行政職員ではないわけです。今日は仕事で来ていますけれども、休みの日はNPOの立場というのがあります。また、私は今、大津市に住んでいますので、大津市民という立場で大津市の政策に関わることができます。あとは行政職員の中でも普段から現場にかかわっている林業や医療関係の技師さんと話をするとか、いわゆる現場に行く、などのことが現場感覚を持つ上で大事だと思います。

どうしても行政となりますと、文章を見てわかったつもりになるのですけれども、実際にはわかっていない。特に最近よく言われているのは東日本大震災が起きたとき、あれは実際に現場に行った職員が帰ってきて、その報告を受けるのですけれども、行った人は現場を見てきていますので身動きも変わってくるし、現場でどういう人が困っていたということを経験しているので、必然的に関係者とのつながりは大事だという話になっているのです。

この前、一般の方から電話がかかってきたのですけれども、福祉行政の責任者は誰だという質問を受けたのです。ところが、よく考えると県だけで完結するものではなくて、例えば国では厚労省が法律をつくりますが、その法律をつくるのは行政職員かというところではなくて、国会議員ですし、県でも知事や議会が関わってきます。逆に言えば行政職員ができることは何かということについては、私は普段からなるべく意識しておりまして、それは最初、前半に深尾先生がおっしゃったとおりのお金だけではないのです。お金と制度というのは結構一般的にあるのですけれども、現場のNPOの人に聞くと例えば広報ですとか、こういう場の設定です。行政の場合はよく信用を与える力があるので、結構色々な人、こういう人はなかなか来てくれないと思っても、行政の立場でお願いしたら来てくれることがあります。ただし、それはインフォーマルな場でつながりをつくっておいて来てもらう。そういうようなくまなく工夫をすることによって、私も何かいろいろとつなげていってあげればと思ったりしております。

○西村氏 あえて聞いてみたいのですけれども、沖野さん以外で何か余り現場につながっていないという行政の方かいたときに、何でそうになってしまうと思いますか。

○沖野氏 繰り返しますけれども、24時間行政職員と思っている人ですかね。それは勤務ではそうかもしれないのですが、例えば絶対その人は住んでいるわけなので、例えば県職員で言うと県庁の仕事が終わって家に帰ると地域の人であるでしょうし、例えばもし御家庭をお持ちで子供さんがいれば、PTAなどの関わりが絶対にあるはずなのです。そのときに

そういった縁を持っていれば、必ず行政の課題は、それは一住民として気づくというか、アンテナになってくるかと思うのですけれども、逆に仕事しなくて、帰ったら休憩時間で自分は何もしない。関係ない。仕事は仕事だと。そういうようなことを思っていれば当然つながりもないでしょうし、そこで知り合った人と何かしようという気にはならないと思っています。

○西村氏 深尾さんから聞いてみたいことはありますか。

○深尾氏 今の話も、公務員もそうなのですから、みんなそうなのです。私なんかも偉そうに地域地域って言っていますけれども、自分の住んでいる地域は何もしていないです。うちの嫁さんが今の地域だとか言っている話を聞いたら、多分、私につばをかけてあんた何言っているのという話になるのです。だからある意味で何か浮遊しているというか、そういうものがある意味で流動化しているし、私なんかそういう意味では地域に根差せていないわけです。

だからある意味で働き方とか、私たちの生き方みたいなものが、何かこれだけ移動範囲が大きくなってしまっているから、結構根差し方は難しかったりとか、今おっしゃったようなことは、実は公務員だけに刃を向けてしまいがちなのです。私たちは何でだよ。町のことを一人の市民として考えないんだというふうに言ってしまうがちなだけけれども、そういう意味では漁師さんだっけそうだし、NPOの人もそうだし、普通に会社で働いている人もそうだしということの、そういうものをどうやったら共有できるのかというか、価値をある意味でなっていくのかというのはどうなのでしょう。そういうものは幻想なのでしょう。そういう社会はつくれないのですか。

そういう社会が先ほど内閣府であった共助社会で言っていて、ただ、確実にここにいる人は変人ですね。変人でしょう。だって日曜日、明日から天気が悪くなるのですよ。週末今日しか天気がいい日ないのに、こんなところに閉じこもって、窓もないところで変な話を聞いているわけです。だけれども、私はいつも言うのですが、変人と言っても怒らないわけです。変える人だと思っているわけです。変人というのは気づいて、今、嫌々来ている人もいるでしょうけれども、多くの人は多分、何らかの形でビビっと来られたりとか、何かに取り組んでおられたりという、ある意味で世の中を変えようとしているかなり全体から見たら変な人たちですが、ある意味でこういう変というのはマイノリティだということだと思うのですけれども、こういうものが広がっていけばいいなと思うわけです。多分、川村さんなんか頑張ってるねとか、すごいねとか、偉いねとかよく言われると思うのですが、そうではない。こういうものは何か自然に地域の中にあるという社会というのは幻想ですかね。どうですか。

○北田氏 今からちょっといい話をしますね。実は今、先生がおっしゃられたような疑問というものがずっと私の中にもあったのです。例えば5万人の市の仕事を受けました。その5万人の市が課題として考えていることを解決するために、取り組みます。5万人住んでいる町で1人入って何かしても、余り変わらないのです。それは先ほど先生おっしゃら

れたような幻想。私が1人頑張っても何も変わらない。それをやり続けていると、みんながすごいね、頑張っているねという評価にはなるかもしれないけれども、世界は実は変わらないのです。

今、私が三重県の梶賀という小さな町、これは170人しか住んでいないのです。浦々で町が離れていますので、隣の集落まで車で20分ぐらいかかるのです。完全に孤立した集落です。例えば5万人の町に1人が入っても何も変わらないし、何も声が届かないかもしれないけれども、170人の集落だったらやれるかもしれないと思って今、漁師をしています。

実際に朝4時から起きて漁に行きます。お昼ぐらいに帰ってきて、そこからお酒を飲んでいるのですけれども、お昼に帰ってきます。隣は当然高齢化です。周りはおばあちゃんばかり。夕方ぐらにおばあちゃんがひょこひょこ家に来て、電気が切れたと。要は電灯を変えに来いということですね。構わないよということで電気を変えに行く。晩になったら、今日おかずぎょうさんつくってと言うと、おばあちゃんがおかずを持ってきてくれる。そのかわりにあした、これを買ってきてほしい。町まで行く足がないので、買い物は私の家にリストが張られていくというシステムになっているのです。

実は町のおばあちゃんたちの用事、電気を変えてくれ、食器の洗剤買ってきてくれというのと同じレベルで色々な問題が持ち込まれるのです。それは同じ町に住んでいる材木屋さんで働いているお母ちゃん、アルバイトをしているお母ちゃん。最近、家が建たない。材木も注文がない。工場の音があまり聞こえない。何とかならないかねという話を持ってきてくれるのです。私は漁師です。漁師の家に電気を変えてくれと言いに来たおばあちゃんが、ついでにあそこの工場から音が聞こえない。やっぱり家は建たないなという地域の問題を投げかけてくれるのです。そこで話をしながら、それだったら売れる方法を考えようよという話になるのです。

私の家は普通の民家、築70年ぐらいの民家を借りて住んでいるのですけれども、毎週色々なところから友達が泊まりに来るのです。東京だったり九州だったり北海道だったり。みんな何をしに来るかという、いきなり世捨て人のように漁師になった友達がおる。あいつのところに行ったら何かわからないけれども、超うまい魚があるというので、魚を食べに来るのです。魚を食べに来た友達に、こういう話があって、あそこをお前はこう言っているのだけれども、何とかならないかとそこで議論ができるのです。こうしたらいいよねという改善の方法をみんなで、べろんべろんに酔いながらですけれども、話をして、では試しにこうしてみようという1つのアイデアが出てくる。

私たちは別に行政でもなければ、NPOでもなければ、それをやる理由もない。でも、暮らしの中で持ち込まれた暮らしでつながりのある人たちの困りごとだから、電気を変えに来るのと同じように、それに取り組む必要性がある。その取組自体が面白いものであれば、周りも巻き込んでいって、1つのプロジェクトとして動くのではないかというのはすごく感じます。

○西村氏　北田さんの話でおもしろいなと思ったのは、北田さんは170人の集落の一員で

ありつつ、都会の人ともつながっているというのが面白い。かつ、こういうふうなパスを出したらおもしろがってくれるだろうという人が魚を食べに来ているわけです。そんなの関係ないじゃんみたいな人ではなくて、それは面白いかもしれないといった人が来てくれている。そうすると、そういう人はもしかしたら5人ぐらいしかいないのかもしれないけれども、そういう人5人が170人の集落に巻き込まれた場合のパワーというのは多分すごいのだろうなと思って、都会の中にいると埋没してしまっている力が、170人側についたときにもものすごい力になるだろうというふうに聞こえました。これは面白いなど。都会の中にいると5万分の1になってしまうみたいなものをどうエネルギー、力に変えていくかみたいなところで、北田さんがあえて170人の集落に行ったことに意味があったんだなと思って、そういうものは感想です。

深尾さんの質問に戻って、川村さんの話を聞きたいのですけれども、いかがですか。

○川村氏 私も感想みたいになってしまうのですが、物語が要るんだなということを先ほどのジャムの話も北田さんから出ましたけれども、今うちは味噌をつくろうということで、あ痛たと思ったのですけれども、例えばうちだったら何で味噌をつくりたいかという、農地でとても立派な肥沃豊かな畑にわざわざ草が生えないように黒いフィルム全部張ってブロックを乗せて草むしりするとか、除草剤だけやって排水を心配せんなどという畑をめくって、1枚ずつ職員の人がめくってくれて、そこに大豆の種を落として、そこで育った味噌豆を子供たちと一緒に青い枝豆から食べたり、そして大きく成熟したものをゆでたときの豆の味も食べてもらって、そしてできた味噌は将来の金太郎さんをつくるようなおいしい味噌ですというナラティブを消費者に見えるようにしていかないことには、商品としては魅力がないんだなというのをとても感じたのと、生活の中で介護保険は介護保険だけというのではなくて、暮らしとか生活を守っていくという点での視点がこれからは絶対に必要だと思うのと、先ほど沖野さんが言われたみたいに、つつい公務員の方は2枚目の名札をつけたらどうだとか、地域張りつけ担当というのがいっぱい出てきますけれども、普通の人もそうだと思うのです。例えば色々な人口減少問題が今すごくクローズアップされていて、5年後にはあなたの集落は生産性人口がいなくなりますよと言われてたり、今の60代、70代の男性あなた方がコンクリートを建て続けてきたから、こんなふうに日本はなくなってしまったんですよと誰かが言われても、みんな「ふうん」と聞いているぐらいで、自分事として捉えられないところが地域課題が変わっていかないところなのではないかと思いました。そこは自分のこととして捉えてもらうには、私たちの活動もそうなのですから、どうするかということかなと思いました。

○西村氏

今の自分もどの話もすごい面白いなと思って、慶應義塾大学の大学院で地域イノベーションという授業を教えているのです。大学院生たちの半分以上が社会人。日本で2番目に学費が高い大学院なので、それを払える人しか来ない。こんな人たちに地域のことにどう関心を持ってもらうかというのが私の授業なのですが、最初の皆さんの感覚は、地域に課

題があって、それを解決したいみたいな感覚なのです。先生、地域の課題ってどういうものなんですかみたいな、そういうスタンスで来るのですけれども、私の授業というのはフィールドワークがあるので、日本全国面白い人に会うために旅に出てもらいます。そこには川村さんみたいな人がいる。もしくは北田さんみたいな人がいる。漁師だけれども、おかしいみたいな。看護師だけれども、おかしいみたいな、そんな人たちがいるわけです。

そういう人たちに出会っていった彼らは帰ってきて何を言うかということ、課題がなかったですという話に変わるので。課題はなくて地域はすごいおもしろかった。魚の話ではないのですけれども、山形に行ったときに、にんじんがめっちゃおいしかったみたいな話を延々しているわけです。

その後にも、でも先生、何かやはりちょっと店は空きが多かったのは気になりましたとか、移動が大変だったので私たちはタクシーに乗ったけれども、普段住んでいる人はどうしているのか。そういうところが気になりましたみたいな話があった。そうすると、今までの人口減少みたいなよくわからなかった話が、ちょっと具体的になってくると同時に、地域が面白いから一緒に何かやりたいという感覚に変わってくる。地域が面白いという感覚をどうやって皆と共有をしていくのかみたいなところが私は結構大事なのではないかと思っていて、人が少ないとあたかも悪いことのように思われてしまうのですけれども、そうではなくて、そこにすごく豊かなものがある。それをどうやってほかの人と共有をするか。たまたま気づいた人にではなくて、もう少し多くの人と共有する方法、それが北田さんみたいに都会の人と共有ができた場合に、きっと大きな力になるのだろうと聞きながら思いました。

沖野さんに戻って先ほどの幻想の話、どう思われますか。

○沖野氏 そうですね。すごく難しいというか、ただ、100%を願わないというのが1つかなというのは思います。きょうは御登壇いただきませんでしたけれども、実は円卓会議の中には東近江市の山口美知子さんですとか、ほかにも何人か行政職員、元・行政職員を見かけたりしますし、西村勇哉さんのダイアログに行かせていただくと、いわゆるソーシャルビジネスをしている人が多いです。今の35歳以下の若者というのは大企業とか公務員になって安定した生活をしたと思っている人はいるかもしれませんが、そうでない人も結構増えてきて、川村さんが取り組まれているように単にお金をもらうだけではなくて、社会課題の解決につながる仕事に取り組んでいる人がすごく多いです。逆にそれは恐らく生活者感覚持ちながらビジネスに取り組んでいる人たちです。最初は自分の仕事しか興味がないという行政職員の中にも仕事の面白さに目覚めて、そこに実はつながっている人と色々コミュニケーションをとって地域に行ったという職員もいますので、あながち全くゼロではないかと思っております。

○西村氏 ありがとうございます。

川村さんに聞いてみたいことがあります。先ほどおもしろいという感覚で色々やっていて、でもこの人なかなかわかってくれないのだけれども、ぜひ一緒にやりたいんだろう

なという人はいたりしますか。

○川村氏 そうですね。なかなか温度差があるのです。スピード感と。私たちは気がついたら、例えばでは今から予算とか計画を立てて年次計画を立ててやっていきたいと思いますと言っていると、1年、2年と経ってしまう。でも地域の課題なおかつ今、目の前で困っている人がいるのに、そんなことをしてられないのです。そうなら困っているなら今すぐこれをしなければいけないというところが早く動きたい。でも、今までの既存の色々な団体というのはスピード感が違うので、そこら辺がわかってもらいたいと思うのと、余計なことをしているというか、しなくてもいいことをしているのではないかと思われがちの部分があると思うのです。そこら辺をわかってもらおう努力もし続けなければいけないのだけれども、そういう面で応援してくださる地域の重鎮というか、若い者、やりたい者がやっていくだけではなくて、その人たちも一緒に最初にやらないかというふうになってくる人が欲しいかなと思います。

○西村氏 一方、今まででそういった協力をしてくれた人たち、この人の協力があってのおかげで前に進めたんだみたいな人と、その人は何でこんな協力してくれたのかみたいなことがもしあれば聞きたい。

○川村氏 私は先ほど画面で出しましたけれども、地域づくり協議会で転倒予防教室をやると思ったときに、そのときの地域づくり協議会の役員さんらが、やりたいと思ったことはどんどん言ってこいと。あんたが多分やるかと思っっていることは地域がよくなることだから、私たちが保証人になってあげるから、役所でもどこでも一緒に行ってあげる。例えばこういうアイデアを出してくれと言ってきて、本当に一緒に行ってくれたので、初めて長浜市からの業務委託を受けられることができたというのは、1つの成功例かなとは思っています。

○西村氏 深尾さんに聞いてもいいですか。北田さんとか川村さんみたいな人が地域にいたときに、先ほどの深尾さんの最後の話はお金の循環だったのですが、そこにも話を入れたいなと思って、域内でお金を循環するのかということと、ほかから来るお金、外に出ていくお金をどういうふうに変えていくのかということについて、こういう川村さん、北田さんみたいな人がいたときに、その人とお金はどういうふうにかかわらせていったら、実際に域内循環に到達していくのでしょうか。

○深尾氏 例えば私自身が今、必死になって言っているのは、投資という言葉のあり方を変える時期なのです。例えば北田さんみたいな人に投資したい。こういう活動を応援したいという寄附という投資もあれば、出資をしたいといった投資のあり方もあると思うのです。自分たちのお金をどうやって活かすかということ、例えば川村さんのところにこういう新しい、例えばあの味噌は大事だとか、そういうふうに物語に共感できたら、売れるように誰か専門的な販路を獲得するためにはお金が要るから、そういうものは投資してみんなで成果につなげていこうというような投資だってあると思うのです。これは社会的投資と呼んでいます。

実は私も先ほど紹介した経済財政諮問会議についてはそればかり言っていて、これも実は骨太の方針の中に入っています。実は日本は出遅れていまして、G8なんかではかなり議論されているのです。世界中がそういう社会的投資のようなものやっつけていかないと、今はもう資本主義の形が大きく変わろうとしている中で、どこかを収奪して儲けるというような今までのモデルは成り立たなくなっていくわけです。日本の地域を見ているとそうです。地域から収奪する場所がなくなってきたわけです。そこまで来たわけです。

そうやってきたときに、今までは利回りだけを求めて投資をしていたものが、社会的な収益といったものを求めて投資をするという側面も出てくると思うのです。これはミクロとマクロの見方があって、例えば年金基金みたいなものの運用を株で運用するのか、例えば一部川村さんのようなところに投資をしたほうが社会保障の相対的なコストは下がるかもしれないわけです。こういう存在がいっぱい地域にあるほうが、例えば介護保険をベースにして、消費型のサービスを使うということだけではなくて、みんなで支え合ってやるほうが下がるとか、こういう漁師さんのところに投資をすることで、ちょっと細かい仕事が地域の中でいっぱい生まれる。そういうようなことをやることで例えば高齢者の人も何かありがたいと言われながら働けるとか、そういうようなことを少しイメージしていくと、例えばそういうところに信用金庫などが投資をするとか、融資をするとか、加速されていくと域内でお金が回っていくわけです。

こういうものも実は今、先ほど御紹介したような信用金庫なんて今、預貸率といって地域で預かっているお金と貸出しているお金がかなり下がっています。大体、平均で50%で、信用金庫預かったお金の5割しか域内で回していないです。こういうある意味でとんとん型のビジネスというか、今までの評価の中で儲からないではないかと。こんなのに金を貸せるかよといったところに新たな評価軸を入れることによって、これだけの社会的成果を生み出す。これはひいては町のためになるのだから、こういうところに投資してもいいよねという評価軸を置くことによって、そういうお金の流れとか、とんとんなビジネスに対してお金が回っていくと、実はそれはそこのビジネスはとんとんなのだけれども、波及効果というのは地域の中かなり生まれてくるわけです。そういうものをきちんと評価していくとか、そういう投資家の市民を増やしていくことがかなり大事だと思います。

これは今、皆さん方の中で半信半疑だと思うのです。そんな投資家があらわれるわけがない。あらわれますよ。私なんかでも今そういうことをデザインする仕事というのは、社会的投資をデザインするというのを仕事にしているところがあるのですけれども、そういうものでお金を出したという人たちが世の中にたくさんおられます。だからそれは先ほどの課題との近接感なのだと思うのです。全然遠いところの課題だと「うん？」と思うけれども、例えば皆さん方が先ほどの川村さんみたいなこういう場で知り合って、情熱を知って、あの味噌だというので本当に頑張っているということと触れ合えたり、そこに住んでいたりすると、では10万円国債を買おうと思っていただけども、川村さんに投資してみたいなお金で、そういうお金を束ねていけるような仕組みやフレームをつくっていけ

ると、実はあながち私は世の中捨てたものではなくて、そういうお金の循環をどうやったらデザインできたり、そういうものが域内でやるとどうやって調達できるかといったことをやっていくと、実は地域の中小企業の資金調達のあり方も変わってくるし、ビジネスモデルも変わってくるのです。そういうようなことは実は起こり始めている。そういうものをうまくどういうふうに取り込んでいくかということが実は課題になるし、そういうものはどう加速させるかということがかなり大事になってくるのではないかと思います。

○西村氏 もう2つ、さらに深尾さんに聞きたいのですけれども、例えばそういったお金は色々なタイプのものがあると思います。信用金庫、金融機関を介す場合もあれば、クラウドファンディングみたいな形で個人がダイレクトに行くといったパターンもある。例えばそういった動きが加速していったって、私の友人もクラウドファンディングを運営しているので、1人の女性がやっているのですけれども、4年間で10億円のお金を動かしてきたのです。そういった動きが加速していく中でほかのセクター、例えばビジネス、NPO、行政、どんなことをしておけば実際に動きが現実になっていくのか。金融機関がそうしたい、もしくは個人がそういったお金の使い方をしたいと思ったときに、でもここの部分が欠けているとそれは片側だけの思いになってしまっていて、もう片側の実際の現場が動いてこないということがあると思うので、それはビジネス、NPO、行政がどんなことをしていくといいのか。

○深尾氏 1つは、これはお金を預けたり、寄附もそうなのですが、社会的な収益をきちんと評価する軸というものが必要になってくると思うのです。これがやられることによってこうなる。実はこれはNPOにこういう社会になっていくとNPOは問われるのです。今、実はかなり問われ始めています。

例えばこの前もある大手の助成金の財団の人と話していたら、もうNPOに助成金を出すのはやめようかなとのおっしゃっていました。何か。成果が出ないではないか。要は本当に成果が上がっているのかどうかわからない。あの人たちがやりたいことをやっているのではないかと問われ始めているわけです。偉そうなことを言ったり、社会が変わると言っているのだけれども、本当に変わっているかどうか、実感を持ってないと言うのです。これは我々が伝え方の問題もあるかもしれないけれども、納得できる形で社会に提示できていないということがあると思うのです。かつ、一部は自己満足で終わっている活動もたくさんあるのだろうと思うのです。そういうものがある意味できちんと淘汰され、再編されていくということも大事なかもしれません。そういうふうな先ほどの投資もそうなのですけれども、社会的な収益や意味、成果をきちんと見える化させていくことは、NPOにとっては大事なことです。

あと一つは企業もそうなのですけれども、企業も1つは先ほどの話もありましたが、要は1つのビジネスパートナーとしてそういうソーシャルな課題に、ローカルな課題に向き合っていく。第2、第3の創業としてのソーシャル領域といったことは十分市場として存在するだろう。かつ、そこにお金が回ってくると、そういうことは想定できる。

これは実はNPOと企業が組むという話であるのです。これはかなり有効だと思いますし、企業の人たちもそういう人に投資をすとか、そういうことに自分たちの資源を解放するということは、かなり前向きだと思います。ただ、そこをつなぐ人が圧倒的に地域に欠けているので、どうしても自分たちとは関係ないことだという引き取り方をせざるを得ないところがあるので、そこはかなりつなぐ人というか、そういうものが超えていける人。最近、私なんかも地域で歩いていると、一緒に色々なことをやっていると、そういうことをまたげる人がどんどん企業の側にも増えてきています。そういう中小企業の経営者や働いている人たちがある意味でそういう面を持ち始めると、地域のお金の循環も含めて変わってくると思います。

最後に行政セクターも、実は補助金の出し方みたいなものが大きく変わると思うのです。補助金も語弊を恐れずに言うと、今、正しく使うことが補助金の目的なのです。要は正しく使われないと、納税者の観点からすると正しく使ってほしい。だけれども、成果を出すための使い方かというところではないかもしれないわけです。

そのところをシフトさせていくために、ある意味でそういう投資型の補助金制度というか、成果を出したらこの分、出すねというような仕組みづくりもあり得ると思います。その前はみんなの市民の人たちがそういうものに投資をして、みんなで一生懸命成果を出したらその分、行政から今の補助金みたいなものがおりて、それが出資した人たちに戻される。これはイギリスなんかでもソーシャルインパクトボンドという言い方に実際に仕組化されていたりします。だからそういうある意味で社会的な収益とか利益みたいなものを軸に、自治のあり方の仕組みづくりを少し抜本的に見直していくことのチャンスのような、だって補助金をもらおうと言うでしょう。もらっているわけではないですね。もらうことがゴールになってしまっているの、そういう意味ではそういうものを少しある意味で変えていくための仕掛けとして、そういう社会的投資みたいなものが作用していくのではないかという気がしています。

○西村氏 北田さん、今のお話から感想を伺いたい。

○北田氏 特にそのとおのだと思うのですけれども、補助金とか助成金とかいう問題もそうなのですが、資金繰りですね。活動することに対しての資金というのはすごくやはり大事なことだと思うのです。

でも何となく資金ありきでないと動けないとか、資金を念頭に置いて組んでしまっただめになるというのも結構あるものなので、私たちは今、NPOでやっているわけではないのですけれども、まさに今、深尾先生おっしゃられたように企業さんと組んでやっている感じなのです。

先ほど少し説明させていただいた材木の話なのですけれども、材木業者と末端とつなぎましょうということで、この3月に東京の表参道、おしゃれなところなんです。そこに結構大きな野菜のマルシェがあるのです。無農薬野菜ですとか、それこそ先ほど言っていましたような無農薬のジャムですみたいなものが並んでいる大きなマルシェに柱をそのまま持つ

ていって、ヒノキの柱を売ってみようというチャレンジをするのです。それは材木屋さんと末端のユーザーと直接つなぐと何が起ころうという社会実験的なものもあるのですが、もしかしたら材木店が柱と思ってつくっていたものは、東京に住む人には柱ではない使われ方をするかもしれない。それを誰も試したことがないので、とりあえずそれを試しに行こうではないかというのを東京までトラックを持っていくのですが、これも当然お金がかかります。

この経費をどこから出すかという、その材木屋さんに出してもらおうのです。その会社は通常、今まで材木をつくっていただけですけど、おじいちゃんが3人か4人ぐらい従業員さんがいて、毎日柱をつくって、その人たちが新しい販路の開拓のために東京までそのチャレンジをしに行く余力はない。でも、それでは私たちかわりに行くから交通費と高速代と飯代ぐらいちょっとくれたら行くという話をさせていただいたところ、それは是非やってみてくれという話になりまして、その材木屋さんの予算を使って私たちはその広告塔として東京で遊ばせていただくという感じですね。

結局は、それで売れたときにまた何かが起こるかもしれないけれども、とりあえずその入口をぶち開けるのに我々が動きましょ。よくあるのは、それをするから行政に予算をつけてもらわないと、こんな社会的なことをするのだからという話ではなくて、それは企業の営業努力の一環として捉えてもらって、我々は入口だけをつないでいくという仕事をやっていくほうがいいのではないかと思って今それをやっているのです。

実は今度東京に持っていくところでは、ギャラも実はもらってしまして、これは私は前からやっているのですけれども、物々交換。コンサルティングであったりプランの提案をするかわりに、物で物納してもらおうという仕組みがありまして、今回はヒノキの柱をもらいました。なので、私たちは活動資金をいただいた上で、東京でちょっとおいしいものを食べて帰ってこようかなと思うと、その何本かの柱を必ず売らないとだめです。それを売らないと向こうでご飯が食べられない。そんな感じでやりますと今の企画を例えばFacebookや、知り合いの人たちにメールで送ると、結構若い子たちはこれ面白いよねとなるのです。なので、実際に東京に行くのは私と尾鷲のほうでは友人1人。2人で車に乗っていくと、東京で5人ぐらいの若い子たちがブースの設置から当日の接客まで全部やってくれる。私たちは尾鷲にいながら東京でやるべき仕事は東京の協力者が手伝ってくれるという状況になっています。

だからいかにおもしろそうにプロジェクトをつくって、いかに楽しくやるか。地域でやることとか、地域のためにやることで深尾先生おっしゃったみたいに予算をもらったようなことを、意外と悲愴感を漂わせながらもらいに行くところがあるのです。私たちこんなに困っているんですよ、予算出してくださいよ。でも悲壮プログラム、プロジェクトには人は集まらないのです。悲壮なのです。なのでできる限り明るく、できる限り楽しくという観点ではさせていただいているつもりですし、多分そのほうが当たっているのだろうなと思うので。

あとは行政のほうに予算を寄るようお願いしに行きます。一緒にやりましょうというものではないのですが、今回、私たちがやっているプロジェクトも行政の方、役所の職員の方に参加いただいています。担当課の方ではないです。実際に担当というかエリアにはまってくる人たちから補助金があるから使いませんかというお話もいただいているのですが、全部断っています。別に何かがあるわけではないのですが、あえて言いますと担当の方は大体3年で変わるのです。結構色々なお話をして、さあ今から行こうというと、担当の人が変わったので、全然知らない人が担当になるのです。そこにまた合せに行くという作業がすごく無駄に思うので、全然関係ない人に仕事を離れて別で協力してくれるなら一緒にやりましょうみたいなスタンスは、何となくあるのです。

○西村氏　でも北田さんのおっしゃったことの構想は共感をするので、これはNPOですけども、行政の方、例えば滋賀県の県庁の方で一番つき合いのある人って全然部署関係ない人で、個人的につき合っている。その人が引きずり回してくれるのです。滋賀の中で。私は滋賀にとってはよそ者なので、住んでいますけれども、言ってもちよろっと住んでいるだけなので、色々引きずり回してもらいながらおもしろい人いるなみたいな見つけて、その面白い人もほかの人を紹介すると、その人たちが来てくれる。それが私の仕事の半分なので、すごくありがたい。

部署関係ない。その人がいるところは別に県民郷土とかである必要は全くないのです。その人の個人の力とネットワークみたいなものがすごく魅力的。なので一緒に色々できるなと思って協働、パートナーになっているわけです。そういうパートナーシップみたいなものは楽しいし、おっしゃったように3年で変わるみたいなことは全然関係ない。新しい部署に行ったら、また新しいことができそうだなみたいな感覚になる。そんなことを思いました。

沖野さんにあえて振ろうかと。先ほど深尾さんが正しく使うみたいなお話を、補助金のお話の中でしてくれたのですが、正しく使うことがある一定の目的になったり、すごい求められてしまうというときに、北田さんみたいに材木を持って青山に行くのだけれども、売れるかわかりませんみたいな人と、どうやって使ってもらかわかりませんみたいな人がいて、でも行ったら何か動くと思うのですみたいな人がいたときに、割合、私はビジネスの感覚は北田さんの的なものだなと思って、わからないけれども、とりあえずやってみようと思って、100%的中というのはあり得ないので、ある程度の確率であるからある程度返ってくるだろうという感覚でやっていくみたいな、そういうものとどうやって正しく使わないといけないのかなみたいなものがつき合っていけるのか。もしくは行政がどうやってつき合っていけるのかみたいなことを聞いてみたい。

○沖野氏　そうですね。補助金は後にしますけれども、深尾先生の話はかなり関連づいていると私も考えておまして、実は消費者としてお金を使うという立場はすごくあるのです。

2つあって、まず個人のレベルから考えますと、例えば私は生活費として、年間大体200

万から300万円使っています。これは当然ご飯とかエネルギーとか、普通に買い物をするわけです。そのほかに例えば都会はそうでもないかもしれないですけども、地方に行くと、今度お寺の改修をするから寄附してくれと言われ、20万、30万を出すわけです。集落によっては年間の自治会費が10万とか20万というところもあると聞いています。ということは、日本に寄附文化はないと言っているのですけれども、実はそうではなくて、あるのです。ただし、それは本当に今みたいに個人が本当にしたいと思っているかどうかは別ですけども、寄附は実は既に昔からしていたのです。例えば日本の場合、特に多神教ですので七五三で何か出すとか、結構みんなお金は色々使うのです。だから寄附文化というのは考え方を変えるとある。

商品については言いましたように、身近に一番わかりやすい例があって、今日も参加されているのですけれども、実は生協活動なのです。生活協同組合は1970年代ぐらいが一番盛んだったのですけれども、あの当時スーパーで有機野菜とかそういう安全なものは売っていなかったのです。売っていなかったので生協というものができて、今では安全な農産物を売るビジネスモデルができましたけれども、今でも生協というのはそういうミッションがある。だから普通のスーパーと何が違うかといったら、自分たちが欲しいものを一般の店舗では売ってくれるところがなかったの、それが生協だったのです。このような動きがあったことを我々は知る必要があるというのが1点。

逆に行政です。特に滋賀県の例で申し上げますと、今でこそ当たり前になりましたけれども、環境分野は取り組みが盛んでして、今では当たり前の古紙70%で漂白するというのは滋賀県が最初に購入を進めたのです。環境に配慮したものを買うようにしたらいいだろうとあって、実際に進んでよいものを買う。滋賀県の年間予算は5,000億強ありますけれども、全てとは言いませんが、行政が物を買うと実は消費者という立場でリードをしていることになります。例えば川村さんがおっしゃっていたようなものをリードするというやり方は実は行政の立場ですごくとることができるので、行政側でできることというのは補助金以外でも結構あるのではないのでしょうか。

もう一つ、事例として先ほどビジネスのお話だったのですが、実は県内でもおもしろい事例がありまして、鹿カレーを普及した県職員がいます。要はシカが増えていて、単に殺すだけではしょうがない。本当に鹿の駆除を回すためにはどうしたらいいのだろうかというのを一生懸命考えて、猟師とCoCo壺番屋と結びつけて、シカを食べ続けるというビジネスモデルにしている。このような取組は、行政の立場でも企業の立場でも変わらないと思います。

御質問の補助金等の話なのですけれども、補助金等に余り意味がないとは言いませんが、そんなに補助金だけで回るとは思っておりません。国でも県でもそうなのですけれども、もともとの補助金は何かという、未来永劫続く制度ではなくて、本当にスタートアップのときにどうしても足りない。そういうときにその分をお渡ししますという意味合いのものでしたがつて、使い道がどうこうというよりは、もともと、その団体が持っている目

的に3年以上ある場合は活動自体を続けることができると思うのです。

最初のこの御説明でもさせてもらったとおり、新しい公共支援事業の本当の目的は実はそうだったのです。3年間しかないけれども、その後にそれぞれ中間支援的なNPOが回るだろうということで始まりました。ただし、役所に訪れてくれるNPOの方とか非営利団体の人は、要望したいから来られるわけです。逆に言えば、私も色々なところで色々つながりをしてきましたが、そういう人たちは役所に来ないのです。要は来なくてもそこでNPOなり企業なりとつながっていますので、逆に役所の中でも変わった人だけはそこに取り込まれていく。そういう状況が今、1つあるので、今おっしゃったNPOのための、何かのための補助金を正しく使うという観点では余りない。

ただし、既存事業で川村さんはよくお使いだと思うのですけれども、例えば農業でしたらこれまで、昔から農業的な補助金の制度とか、商業分野でも恐らく以前から中小企業振興のための補助金とか、異分野で過去これまでから政策のために使われてきた補助金というのは当然ありますので、それをうまく使う、あるいは使えなければ例えばNPOも使えるようにしてほしいと要望していくということは必要だと思います。

○西村氏 川村さん、何かいっぱいたまっていると思うので、一番言いたいことを言ってください。

○川村氏 本当に人として生きて何を残せるかだなと。人生50年超えて元気で暮らせている中で、ではこれから後の人生をどちらに向いて生きるかなと思ったときに、10年後、20年後に地域が豊かであってほしいし、若い人が魅力を感じてくれる長浜であったり、七岡の里であったりしてほしいなと思ったところから、私が向かう方向は決まったと思います。

それまで悶々として、肩に色々な力が入っていたのだけれども、そう思ったときにずっと、これが自分の生きる道とまでは言いませんが、そこら辺を思って、それが伝えられたら人は巻き込まれてくれるのではないかと思っていて、その輪を広げていく。お金もきちんと払えるように産業として成り立つ方向を模索していく。それは企業的な経営センスというか、コンサルというか、そういうところも必要になってくるのだろうし、行政の方も持っておられる色々な知識とかももらって、いっぱいいっぱい吸い込みたいと思います。

○西村氏 4人皆さん全然違う立場でセクターも違いますし、かかわり方も地域が違うので、皆さんにとってのよりよい地域づくりってどういうことだと思うのか伺いたい。どなたからでも。

○沖野氏 先ほど深尾先生が幻想ですかとおっしゃったことだと思っているのです。まさに地域として本当に暮らしていて、例えばそれは先ほども言いましたけれども、本当に働く場だけではなくて消費者でもあり、有権者でもあり、地域の主体でもあり、本当に色々な立場を自分が認識して、それぞれの立場でどうあるべきかそれぞれ考えるというのが地域かなと思います。

○西村氏 ほかの3人の方がいかがですか。

○北田氏 困りごと、困っているという言葉は隣の家の人でも常に誰かに言える環境がある地域ということ。これに困っているんだというのを普通に言う。例えばワンルームのマンションに住んでいて、隣の人も上の人も下の人も知らなかったら、家で困っても誰に困っているんですと言ったらいいかわからないというのが結構都会であるのです。本当に地域で生きていくとか、いい地域というのは、困っているんだと言えるのが簡単に言える地域なのかなと思います。

○深尾氏 難しいですね。難しいのですけれども、何か安心して生きていけるとか、安心して死ぬということ。とどのつまりになってしまうような気がするのですが、そのアプローチの仕方みたいなものは今からの時代を見据えていくと、例えば低炭素型のコミュニティでそういうものを担保していこうとか、同じようなことでいくと持続可能性だとか自己有用感を持ちやすいとか、みんなが今、自分でなければだめだとかいうものが言いにくい社会というか、とっかえひっかえ、かわりは幾らでもいるよみたいな矢を突きつけられて生きているようなところがあるので、そういう部分がある意味で自己有用感を持っているとか、地域というのはどう捉えるかによっても変わってきますけれども、何か安心して生きて助けると言える。今おっしゃったように、何かそういうものを統合して、よりよいというのはそういうことではないか。抽象度が高くなりますけれども、そう思います。

○川村氏 たちのいいおばちゃんできょうと思えます。本当に色々な人が暮らしているのを認め合えるようなところだったらいかなと思います。

○西村氏 ありがとうございます。

今、最後なのでももとの話題に戻ろうかなと思ったのですけれども、社会課題の解決と言うとわけがわからなくなるので、人口減少だったら人が増えればいいのかみたいな話に入るときにわからないではないですか。それでいいのかどうか。何かいい地域づくり、それぞれ違うと思うので、そこをもう一回踏んでから最後のところに入っていきたいなと思いました。

最後、これだけまだ残っているなと思ったのが、地域の中でつながりをつくる人みたいなことを何人かおっしゃっていたのですけれども、その人はどういう人なのかみたいなことは余り語られなかったので、例えばこういう人がいるといいんだという人の像かもしれないし、こういったことをやってくれる人がいるといいなということかもしれないのですが、皆さんにとって地域の中でつなぎをつくってくれる人、どういう人のことを指しているのか。もしくはこういう人が増えてくれたらいいなということを知りたいです。

○深尾氏 私はよくこういうものをやると、こういう問題を行政が引き取ると地域リーダー養成講座何とかなってしまっていて、全然面白くなくなってしまうのです。逆に言えば地域の課題に接している人は結構たくさんいると思うのです。この前も運送業者のドライバーの人としゃべっていても、そういうものにぶち当たっているわけです。あそこのおばあちゃんのところに行くところだとか、あそこはごみ屋敷で大変だ。これはごみ屋敷になる事情というのはどうもありそうだとか、荷物があるエリアの中で運びながらもそういう課

題にぶち当たっている。これはこの前しゃべったトラックのドライバーもそうでしたが、例えば信用金庫とか地域の金融機関の営業マンだってそうなのです。色々なご自宅のお伺いをしたりとかする中で、実はそういうものにぶち当たっているけれども、それは自分の仕事ではない。気にはなるけれども、仕事ではないと思っているわけです。だけれども、気になっているわけです。だから逆に言えばそういうことを気になっていることがある人たちがつながることができたり、そういうことが気になってんねんと言える場が実は物すごく大事なのだと思うのです。

先ほど私の話の中で申し上げた行政の合意形成ルールが変わっていくだろうというのは、今までそういう人たちの声というよりも有識者と言われる人たちがそういうものが普遍化したものを声としてこう言われているとか、こういうことではないかというふうに言っていることを、ある意味で総合計画も含めて計画化していくのだけれども、実は本当に生の声みたいなものが詰めていけたりとか、そういうものが持ち込まれたりしながら、そうなんだと。ただ、それは今までだとそれはあの人の問題でしょうと置いてしまうわけです。あの人が片づけられないからごみ屋敷になっているのでしょうとなってしまうのだけれども、だけれども、それはまさしく現実起きている問題で、どうにかしたいとか思っている人がいたり、その人が抱えている背景みたいなものを見ていくと、実はその人だけの問題ではないかもしれないわけですね。

それに対して先ほどおっしゃった放っておけないと思って動くみたいなのところをどういうふうにみんなで共有しながらドライブさせていくかみたいなのところの回路が、私たちの社会の中で少ないのだと思うのです。あなたは営利目的でお商売で荷物を運ぶ人になってしまうわけです。そうではなくて、そういう中で実は見えてくるものを持ち込めるというか、だからある意味で先ほどおっしゃったコーディネートする人材みたいなことを左下の部分でとおっしゃったのだから、実はそういうふうに捉えて見ると、ローカルの中でそういうことにつながっている人というのはかなりいるのだと思います。そういうものをいかに私たちの社会が有機的にある意味でつながっていけるか。そういう人たちがある意味で越境しながらどうにかしたいよねという薄い気持ちというか、それが大きい気持ちの人は行動ができるのですけれども、薄く気になっている気持ちを束ねていくような場なのか、それを少し編み直していくようなことがNPOとか本来そういうことを少し仕掛けていくとか、もしかしたらこれは中間支援と言われて人たちの、私たちも含めて仕事なのかもしれない、そういうものがある。

だから人材を育成しましょうという話ではなくて、多分そういう地域の生活の中に、そういう問題に気づける人とか、そういう人たちとどうつながるか。そういう人たち同士がつながったりとか、そういうところに専門的な行政機関の人たちや専門職の人たちやNPOの人たちが交わりながら、課題解決というものに取り組んでいけるような場とか関係性みたいなものを生み出していく。それは大事だと思うのです。そういうときにどういうサイズ感でそういうものを考えたらいいかというのは、先ほどの議論と同じであると思うの

です。例えば大津市みたいな単位で考えても、多分それは難しく、何となく中学校区ぐらいのエリアの中でそういう小規模な自治の姿みたいなものを、どういうふうに私たちがイメージしながらつくっていけるのかというのが大事なのかなと思いました。

○西村氏 まずは川村さんに、今、深尾さんの話の中でNPOもそういった役割が担えるのではないかという話が出てきたので、御自分の実際に周りで起こっていることも含めて、つながりを紡ぐ人みたいなことについて御意見をいただければと思います。

○川村氏 住民さんから、本当にそれこそ隣の人であったり、色々な人から相談を受ける中で、ではそのためにどうしたらいいか、自分たちにできることは何か、どこにつないだらいいのかということも含めて、私たちは動く長浜の出先機関であったり、それこそ診療所の出先であったり、その時々手足が伸びるような状況で選べるように、本当に何でも相談窓口みたいな、暮らすための安心窓口というような感じになっていくことが求められていることなのかもしれないなど、先生の話聞く中で思いました。

中だけでなく、先ほど越境という言葉が出ましたけれども、地域の中だけの解決ではなくて、外からのエネルギーといいますか風といいますか、力というか、その辺の風通しをよくしていくことで私も去年の秋、東京の青山あたりに行ったときに、向こうの人から見たらすごい西黒田の金太郎村でこんなことを考えて、こんなことを思っているのと言ったら、何て素敵な夢を持っているのと言われて、そんなところ絶対今年、絶対みっちゃんのところ遊びに行くからと言ってもらったり、私たち本当に人間扱いされない満員電車の中で、職場に着くころはへとへの状況で、そこから仕事をするのだけれども、もしそこでその状況の美しい自然環境の中で、医療もある程度、教育もある程度、それで食べていけるようなシステムがあったら、そういったところで子育てしたいよねという人の声とかを聞くと、発信は大事だなという感じを思っています。

○西村氏 北田さん、いかがですか。つなぐ人の話。

○北田氏 面白い人だと思います。客観的に。つなぐという能力は育てられないと思うので、すごく残念な話なのですが、それになりたくてもなれない人は結構たくさんいるので、それに期待をさせて教育しましょうとか、プログラムをつくりましょうというのはすごく残酷な話ですが、物すごく無駄な話なので、そうやって人を集めてやってみてもつなぐ人にはなれないけれども、一生懸命発信していこうねという役割をちゃんと明確にしてあげるとというのが1つなのかなと思います。その中から多分イチローみたいな人が出てくる。イチローは育てられないと思う。出てくるのをひたすら待つ。

○西村氏 沖野さん。

沖野さんのところからコメントをもらおうと思っているので、最後にコメントをください。

○沖野氏 私が思っていたのは、色々なセクターをつなぐ人というのは何となく定義としてあるのです。それは何となくアンテナみたいなものがあって、この人かなという人を呼んできたなら、例えば北田さんと川村さんとか、こういう人たちかなと。

私が言いたいのは2つです。1つは例えば行政が「何とかコーディネーター」といって、コーディネーターができたと言うのですけれども、そうではなくて、実は川村さんなんかまさにコーディネーターだと思うのですが、御本人がコーディネーターということをおっしゃらずにコーディネートをしていることです。これは結構大事なところで、中間支援の議論になったときもそうなのですけれども、中間支援機能が私は絶対に必要だと思います。必要ですけれども、「私は中間支援だ」という中間支援組織では余りなくて、実は本当に何かしようと思っている人たちが、いつの間にか中間支援的なことをしていたということなのです。

結構私もこれまでこういう円卓会議とか、今日の参加者の方、かなりつながっている方がいらっしゃるけれども、そういう方たちの集う場が必要かなと。例えば今は福祉にありますが、福祉の中では滋賀県の生活支援者ネットというすごい人が集まっているメーリングリストがあるのです。もう一つは公民館でも全国的にメーリングリストがあって、そういうものでつながっている。ただし、行政もそうなのですけれども、NPO、市民セクターも結構縦割りです。川村さんみたいに福祉をやっている農業とつながる人は少ないのです。それは市民もそうだし、もちろん行政もそうなのです。

行政のできる役割としては何だろうと私も考えたところ、1つは先ほど申し上げた信頼性というものが結構あるので、それぞれの分野でこういう変わった人たちを今回のように1つの場を集めて、何か話してもらおう。それは県の場合だと県域でやればいいでしょうし、市町の場合は市町単位あるいは小学校単位。それを見繕うとか発見する能力というのは行政職員にかなり求められるかなと。その中で例えば今日もそうですけれども、こういう講演会をしていただいて、先ほども申し上げましたが、川村さんのように余り意識して人に気づいていただく。実はあなたはすごいコーディネーターとしての役割も果たしていると。それがすごい大事なことで気づいてもらうことが大事なかなと思っています。

今日のコメントとしては、深尾先生に今まで言いたかったことを講演で触れていただいたので、そこはすごく安心してきょうは臨めました。行政セクターの代表として話すつもりですけれども、半分ぐらいは市民的な立場で話していたような感じもありますが、またこういう機会は大いにやっていただきたいと思いますし、もう一つは、今日恐らく会場に60~70の方がいらっしゃいますけれども、内閣府のほうでまとめてもらえるとお聞きしていますが、要は情報発信ですね。ホームページなどで情報発信することがもっと大事なことかと思っています。よろしく願いいたします。

○川村氏 今日ありがとうございます。

まさに地域創生とか地方再生とか、そのような言葉が日常的に耳にするようになって、いるものは地方だと思っていることはなくて、自分がいるところはど真ん中だと、周辺地域とか地方とか言われると何かさも隅っこで息絶え絶えになっているような、それこそ先ほど悲愴感が漂うような気がしますが、とても豊かな場所で、豊かな人が住んでいるところだと思って私も胸を張って生きています。やはりその中の発信をし続けること。

手をつなぐことが人として生まれた中での幸せなことだなどと思いながら、皆さんの話を聞いて、面白い、楽しい、わくわくすることを考えていってもいいんだなというのがわかったので、すごく自信を持ってまたこれからも目を開けて妄想を続けていきます。よろしくお願いします。

○北田氏 どうもありがとうございました。漁師で色々しゃべりましたけれども、言っても一漁師ですので、先ほどの休憩時間も含めましてたくさん色々な方にお名刺をいただいたりしたのですが、漁師なので名刺はないのです。ですのでFacebookにおりますので、Facebookで見つけていただきまして、先ほど言っていたような大ざっぱな乱暴な仕組みというのは、私の家に泊まっていたらいいので、私の家でご飯を食べていただいて、町を歩いていただくと一番よくわかると思うので、興味がある方はメッセージをいただければスケジュールを合わせさせていただきます。ただし、寝るのは寝袋になります。それだけ一応覚悟して御連絡いただければありがたいと思います。どうもありがとうございました。

○深尾氏 ありがとうございます。そういう意味では色々な人たちが多分課題にぶつかったり、ここが何とかならいいなという種は多分ここにおられる人なら何か1つはあったりとか、先ほど言ったような色々な地域の中で動いている人たちは持っているので、そういうものをどういうふうに取り込める場所をつくるかということが大事だなどと思います。

先ほど御紹介した円卓会議なんかも、まさしくそういう場だと思います。今、東近江市でも少しかわらせていただいて、円卓会議で地域の課題をみんなで解決しよう。そこにはセクターなんか超えて色々な人たちがやろうという場を今つくり始めています。圧倒されます。市民の人たちのパワーに圧倒されて、変な薬でも飲んだのではないかというぐらいみんな熱い議論をして、持続され始める。ドライブされ始めるのです。もっと自分たちを信じたほうがいいのか、市民とか社会というものの可能性を信じたほうがいいのかと思っていて、あきらめモードになるのではなくて、自分たちももっと色々なことができるんだということは、小さな地域に行けば行くほどというか、そういうものを物すごくエネルギーとして感じるので、そういう可能性を捨ててはいけないのだろうということは1つ思います。

あと一つは、自分たちの地域のことを知っているようで知らない中で議論をしていることは多いのではないかということ実は思います。例えば先ほどおっしゃった人が減って悪いのか。高齢化して悪いのかというものに対して、やみくも感があるのです。実は産業とか今までの私たちの政策のつくり方も多分そうで、工場を誘致すれば自分たちの町の課題を解決するみたいな話というのは実はそうなのです。雇用をつくり出す。では具体的に何人の雇用をつくり出すと自分たちの町は持続的に回っていくのかということを実はデータで余り捉えずに、いや工場なんだという話になってしまうわけです。そういうやみくもな話というのは実は幻想に近くなってきていて、工場なんていうのもほとんど今からなかなかそういうものだけではなくて、実は例えば先ほど御紹介した域内循環といった経済指

標のようなものを自分たちの町できちんと分析してみて、自分たちの町の強みはこれなんだ。だからここに資源投入して、こういうことになってくれる人たちをこれだけ増やせば20年後こうなるよねということは、予測できるのです。

そういうふうなある意味で自分たちの町の現状を知ったりとか、そういう情報を共有しながら町のビジョンというものを、未来みたいなものをみんなで語り合っていくと、実は非常に現実的なプランができ上がったりとか、やみくも感がなくなっていくところ是非常にああいう、水俣の事例もそうなのですけれども、やっていくと非常にいいのかなと思いました。そういう意味では楽しむという言葉がありました。楽しみながら私の言葉で言うと可能性を信じたほうがいいのか、ポテンシャルというのか、今から地域の時代なので、そういう意味ではそういうポテンシャルを信じて頑張っていきたいと思いました。

○西村氏 ありがとうございます。

最後に私からもコメントを2つ。

1つは、つながりとか協力関係を使って何か新しいものを残していこうみたいなものはいっぱいありますし、私のところにも大量に相談が来るのですけれども、結構多くの方が勘違いしているなと思うのは、一発勝負ですごいつながりができると何かが起こるみたいな、そういうふうにいる人は結構多いなと思います。やっていない人ほどそう思うなと思っていて、先ほどの幻想の1つだと思うのです。今、実際に慶應義塾大学の先生と研究をした結果が、小さなつながりがたくさん積み重なっていくと、結果としてコラボレーションができる。その小さなつながりは同じ人との繰り返しではなくで、色々な人との小さなつながりが連鎖していくと、最後大きなつながりが生まれたりするみたいな、そんな感覚なので、いかに多くの人と小さなつながりをつくるのかみたいなものが協働というテーマの鍵だと思って、そういう意味では今日この5人、すごく楽しくやらせてもらいましたが、ぜひ次回何かこういう場があるのであれば、皆さん同士が話せるような時間をこういった場に組み込むことができると、そこに小さな出会いと共有が生まれるだろうと思いますので、そんなこともまた起こしていくことができればいいなと思います。

というわけで、私の時間はここまでとさせていただきます。ありがとうございました。
(拍手)

6 閉会

○司会 ありがとうございます。

ファシリテーターの西村様、パネリストの皆様、どうもありがとうございました。

以上でパネルディスカッションを終了いたします。

客席の皆様、今一度盛大な拍手でお礼を申し上げたいと思います。(拍手)

本日は長時間にわたり御参加いただき、まことにありがとうございました。

以上をもちまして本日のプログラムは終了させていただきます。お帰りの際にはアンケートを御記入いただき、出口にあります受付まで出していただくようお願いいたします。

以上をもちまして「共助社会づくりフォーラムin滋賀」を終了とさせていただきます。本日の御参加まことにありがとうございました。(拍手)